

子どもの主体的な学びを支援する学校図書館活用の在り方

ー学校図書館を活用した言語活動の充実を目指してー

総務企画課生涯学習推進室

研究の概要

教科のねらいの達成と、目指す子どもの姿に迫ることができる学校図書館の活用について、教員が具体的なイメージを持てなかったり、授業で図書資料を活用した効果について実感できていなかったりという現状があった。これを受け、研究協力員4人とその所属校の協力を得て、本研究を行うこととした。

研究仮説を「学校図書館を活用した言語活動を充実させることで、思考力、判断力、表現力を高めるとともに、主体的、意欲的に学ぶ子どもを育むことができる」とし、授業実践、検証を行った。3年間の実践研究の最終年次に当たる本年度は、研究協力員の所属する小中学校4校で行われた、学校図書館を活用した授業及び読書指導の実践についてその効果を行動観察やアンケート、学校図書館の貸出冊数調査などから分析、検証した。

この研究から、授業構想の段階で付けたい力を見極め、図書資料をより有効に活用する選書や交流等を吟味することで、付けたい力をより確実に付けるための言語活動を充実させることができることが明らかになった。そして、このような言語活動の充実により、子どもたちの学びが深まり、思考力、判断力、表現力が育成されることや、学びが広がり、主体的、意欲的な学びが育成されることが証明された。これらは、教科で付けたい力を反映させた図書資料を活用することでこそ、得られた効果である。

キーワード：学校図書館活用授業、授業構想、言語活動、教科のねらい、
学校図書館、主体的、司書教諭、学校司書、読書指導

目 次

I	主題設定の理由	1
1	研究の背景	1
2	研究の目的	2
II	研究の仮説	3
III	研究の期間及び方法	3
1	研究期間	3
2	研究方法	3
(1)	研究協力員による実践研究	3
(2)	調査等による検証	4
IV	研究内容	4
1	研究協力員による実践研究	4
(1)	学校図書館活用授業年間計画の作成	4
(2)	研究授業の単元計画と指導案の作成及び実践	5
(3)	研究授業以外における学校図書館を活用した授業の単元計画及び実践	26
(4)	学校図書館を活用した読書指導の実践	27
2	分析と考察	30
(1)	学校図書館を活用した言語活動の充実	30
(2)	学校図書館を活用した言語活動の充実による子どもの思考力・判断力・表現力の育成及び主体的、意欲的な学びの育成	31
V	研究のまとめ	32
	【参考文献】	32
	【参考資料】	33
	【研究組織】	37

子どもの主体的な学びを支援する学校図書館活用の在り方

－学校図書館を活用した言語活動の充実を目指して－

総務企画課生涯学習推進室

I 主題設定の理由

1 研究の背景

学習指導要領では、今日の情報化社会を担っていく子どもたちに求められている「生きる力」につながる学力の要素として、「主体的に学習に取り組む態度」を身に付けるために必要とされる思考力、判断力、表現力を育むため、「言語活動の充実」が求められている。そして、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改訂について」（中央教育審議会答申）によれば、この言語活動を支える条件として、①語彙を豊かにすること、②読書活動の推進、③学校図書館の活用や学校における言語環境の整備が重要であるとされている。つまり、学校図書館を活用して言語活動を充実させることは、子どもたちが現代社会を生き抜くための、主体的に学習に取り組む態度を身に付けることにつながる。

学校図書館は「教育課程の展開に寄与（学校図書館法第2条）」する機能を持っており、学習指導要領の改訂に伴い、そこで求められる教育に学校図書館がどう寄与していくかを考えていくことは必須である。具体的には、教育課程全般において、学校図書館活用の在り方を探り、言語活動を充実させる授業や読書指導を実践していく必要がある。教科書だけでなく学校図書館の多様な図書資料を活用した学習活動により、個に対応した学習活動が充実したり、教科書の内容をより深く理解したりすることができ、教科のねらいを達成させることができると考える。そして、これらの学習活動により、子どもたちは関心を持って自らの課題を設定し、主体的、意欲的に学び続けていくのである。

本県では、学校図書館に関する研修として、本センター主催研修「司書教諭実践力向上研修」や「学校図書館活用で授業改善」、「子どもの心を育み学びを広げる読書指導」を行ってきた。また、本研究の研究協力員による学校図書館活用授業の実践公開を行ってきた。学習指導要領の改訂及びこれらの研修、研究により、学校図書館活用授業や読書指導の重要性について、教職員の認識は広がりを見せ、教科のねらいを達成させる学校図書館活用授業の実践も増えている。しかし、これらの実践においても、その中心は司書教諭や図書館担当に限られている場合が多く、学校内でも全教職員の共通認識の下、実践が進められているとは言い難い。また、図書資料を活用しても、教科のねらいに迫るような授業には至っていないという現状もある。本センターの研修参加者からは「学校図書館活用と読書指導がいかに学習指導要領と結びついているかが再認識できた」という感想がある一方で、「具体的な取組についてもっと研修したい」「学校図書館を活用した授業を構想するヒントが欲しい」という声が挙げられている。これらの現状の背景には、学校図書館を活用した授業の具体的なイメージを持てなかったり、効果を実感できなかったりしていることが考えられる。

学校図書館を活用した授業を構想することは、授業改善につながり、学校体制での取組

と、教科のねらいを達成させるための授業構想が不可欠であると考える。

2 研究の目的

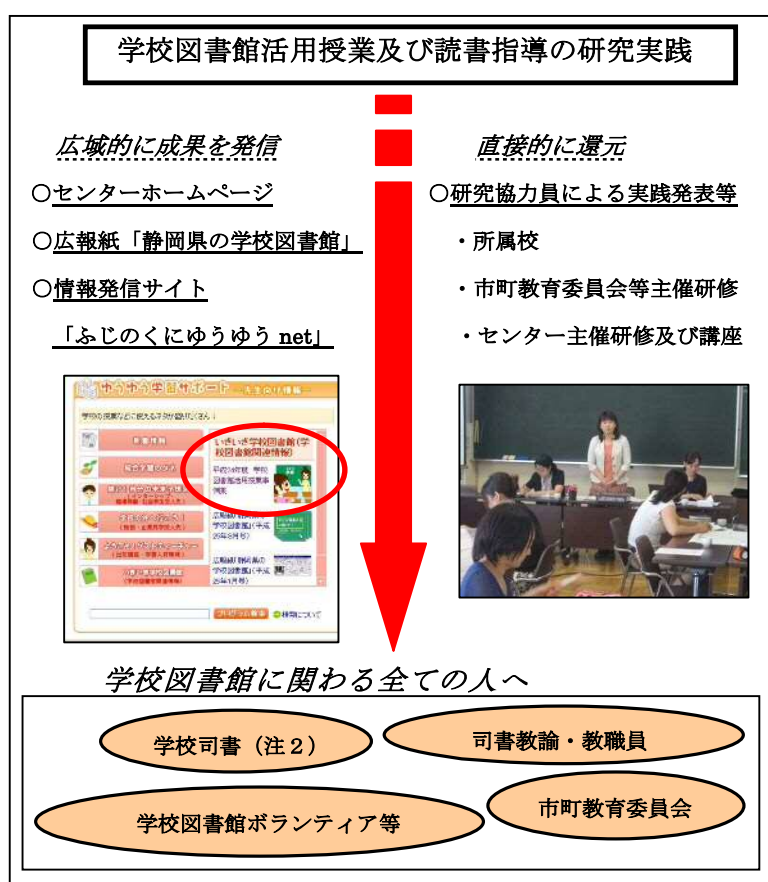
本研究は、教員が学校図書館を活用して言語活動を充実させる授業を具体的にイメージすることによってその効果を認識し、実践につなげていくことを目的としている。これまでの3年間、研究協力員による学校図書館活用授業の実践研究を行い、その効果を検証し、発信してきた。

また、授業実践に加え、言語活動の充実を支えるものの一つとして子どもの読書活動の推進も欠かせないと考え。読書をすることは、語彙を豊かにするとともに、「知りたい」「読みたい」といった主体的な学びへの発展も期待される。そこで、学校図書館を活用した授業に加えて、読書指導についての実践研究も行ってきた。

3年間の研究の成果は、センター発行の広報紙「静岡県の学校図書館」や、センターホームページ上に公開するとともに、研究協力員による研究実践を「学校図書館活用事例集」として「ふじのくにゆうゆう net」(注1)から発信し、学校図書館活用について啓発していった。

また、研究実践を行った研究協力員は、学校図書館活用の推進者として、各市町における研修会等を牽引するだけでなく、センター主催の学校図書館活用及び読書活動に関する研修や講座において、提案授業や実践発表を行った。これらにより、研究の一層の還元にも努めた(資料1)。

資料1 研究成果の発信及び還元



(注1) ふじのくにゆうゆう net

子ども向けの学習やイベントの県の情報発信サイト。「ゆうゆう学びのサポート」からは学校向けに学校図書館や出前講座等に関する情報を発信している。

(注2) 学校司書

専門的な知識・経験を有する学校図書館担当事務職員。本研究では、学校図書館司書、学校図書館補助員等と呼ばれるいわゆる学校司書をさす。

Ⅱ 研究の仮説

学校図書館を活用して言語活動を充実させた授業を構想し実践すること、及び計画的に読書指導を行うことで、子どもの主体的な学びが育まれると考え、研究仮説を次のように設定した。

学校図書館を活用した言語活動を充実させることで、思考力、判断力、表現力を高めるとともに、主体的、意欲的に学ぶ子どもを育むことができる。

Ⅲ 研究の期間及び方法

1 研究期間

平成 23 年度から平成 25 年度まで（3 年間）

2 研究方法

県内 4 市に協力を依頼し、学校図書館活用に先進的に取り組む研究協力員を選出した。研究協力員は 3 年間にわたり、それぞれの所属校において、「主体的な学びを支援する学校図書館活用」の実践を行った。

3 年間を通して、研究協力員 4 人がそれぞれの所属校で実践研究を行った。研究の 2 年次にはそれらの実践のうち、抽出校 1 校での取組を対象に検証を行った。そして最終年次である今年度は、2 年次の抽出校での結果と課題を踏まえ、4 人の研究協力員の所属校での実践についてまとめ、検証した。さらに、実践の成果については学校図書館に携わる人への広域的な発信と直接的な還元に努めた。

(1) 研究協力員による実践研究

ア 学校図書館活用授業年間計画の作成

学校図書館法第 2 条の、「学校の教育課程の展開に寄与する」学校図書館を活用した授業を実施するために、年間計画を作成し、学校全体での意図的、計画的な学校図書館の活用を推進した。

イ 研究授業（国語）の単元計画と指導案作成及び実践

本研究における学校図書館を活用した授業実践は、国語科を中心に行った。国語科では、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること（中教審答申『小学校学習指導要領解説国語編』）をねらいとしており、国語科における学校図書館を活用した言語活動の充実、各教科の学習の基本となる国語の能力を身に付けることになるからである。そして、教科のねらいを達成する学校図書館活用授業を構想するために、研究担当者会にて、研究協力員と研究顧問及び本センター指導主事で、学校図書館活用授業の授業構想についての検討と実践を行った。

ウ 研究授業以外における学校図書館を活用した授業の単元計画及び実践

アで作成した「学校図書館活用授業年間計画」にしたがい、研究授業以外の様々な教科においても学校図書館を活用した授業を継続的に行った。

エ 学校図書館を活用した読書指導の実践

授業以外の場面でも子どもたちの主体的な学びを育むことを目的に、計画的に読書指導を実践した。

(2) 調査等による検証

実践の効果を検証するため、研究協力員の所属校において、以下の調査を実施した。

ア 研究協力員及びその所属校の職員に対する学校図書館活用に関する聞き取り調査

研究授業や読書指導における子どもの表れについて、研究協力員及びその所属校の教員や学校司書に聞き取り調査を行った。

イ アンケート調査

研究協力員の所属校児童・生徒に「学校図書館活用に関するアンケート調査」を実施した。

ウ 学校図書館利用状況調査

研究協力員の所属校児童・生徒の学校図書館における貸出冊数等、学校図書館利用状況を調査した。

IV 研究の内容

1 研究協力員による実践研究

(1) 学校図書館活用授業年間計画の作成

4人の研究協力員は司書教諭でもあり、教育課程の展開に寄与するため、以下のように学校図書館を活用した授業を実施する各教科の単元を、系統的に計画した(資料2)。この計画は、学校図書館を活用し教科のねらいに迫るような授業改善を促すとともに、教育課程全体を通して、組織的、継続的に言語活動の充実を図ることを目的としている。作成に当たっては、「ふじのくにゆうゆう net」で公開されている「学校図書館活用授業年間計画」を参考にした。

各研究協力員が作成した年間計画は、校内で活用されるだけでなく、各市町における研修会等を通して活用された。研究協力員が市の教育研究会学校図書館部の部長でもある牧之原市では、以下に示した研究協力員作成の学校図書館活用授業年間計画を参考にして、市内の小中学校でも学校図書館活用年間計画を作成する取組や、それらを基にした授業実践が進められた。

資料2 学校図書館活用授業年間計画(牧之原市立相良小学校)

	4月	5月	6月	7月	8, 9月	10月	11月	12月	1月	2, 3月
一 年	生「がっこうだいすき」(図書館の探検)	国「おはなしが好きなよ」	国「なにがかくれているのしょう」	国「おはなしのくに」 「おおきななな」 「ほんをよみましょう」	国「読書感想文を書こう」	国「はたらくじどうしゃ」「のりもの」 「天にのぼったおけやさん」	国「りすのわすれもの」「天にのぼったおけやさん」	国「本のせかいをたのしむ(うみへのながいたび)」	生「むかしのあそび」	国「お手がみ」
二 年		国「本をさがして読む」 生「やさいをそだてよう」	国「図書館へ行こう」	国「むかしのお話を読む」	国「読書感想文を書こう」 国「きつねのおきやくさま」	国「さけが大きくなるまで」 国「生き物のことをせつめいしよう」	生「おもちゃランドをひらこう」	国「むかしのお話を楽しむ」 国「お話びじゅつかんを作ろう」		国「アレクサンダとぜんまいねずみ」
三 年		国「本の仕組みを知ろう」 理「チョウをそだてよう」	国「国語辞典の引き方」 理「植物をそだてよう」	国「お話のすきな場面をくわしく書こう」 理「自由研究」	国「読書感想文を書こう」 総「どうやってお茶が飲み茶になるのかな」	国「くらしと絵文字」 総「どうやってお茶が飲み茶になるのかな」	国「モチモチの木」	国「読書けいじ版を作ろう」 国「ことわざと慣用句」		国「おにたのぼうし」

四年	理「季節と生き物〈春〉」	国「漢字の部首・漢字辞典の引き方」 社「火事を防ぐ」	国「じょうほうけいじ板を作ろう」 国「日本語のひびきにふれる」短歌 理「季節と生き物〈夏〉」	社「ごみはどこへ」 理「自由研究」	国「読書感想文を書こう」 理「ほねと筋肉」	理「季節と生き物〈秋〉」 理「星や月」 社「昔のくらし」 総「環境についての自己テーマ追求」	国「ごんぎつね 新美南吉の本を読もう」	国「読書発表会をしよう」 国「故事成語」	理「季節と生き物〈冬〉」 理「星や月」	国「夕鶴」
五年	総「世界のこんにはを知らう」		社「農業のさかんな地域」 理「メダカの飼い方」	社「水産業のさかんな地域」 家「わたしにできる家庭の仕事をふやそう」 理「自由研究」	国「読書感想文を書こう」 総「いろいろな衣装を知ろう」	国「椋鳩十の世界」 国「世界遺産 白神山地」	国「『物語』を楽しむ」	国「本の世界を深める 宮沢賢治の本」 国「読書すいせん会を開こう」		社「日本の世界遺産レポートを書こう」 国「みずさがしの旅」
六年	社「大昔のくらし」	社「歴史新聞を作ろう」 理「体のつくりとはたらき」 家「朝食を考えよう」		国「日本語のひびきを味わう 春はあけぼの」 理「母親のおなかの中での子どもの成長」 理「自由研究」 社「歴史カルタを作ろう」	国「読書感想文を書こう」	国「戦争がテーマの本」 総「行ってみたい国を紹介しよう」	国「俳句・短歌を作ろう」 理「火山活動や地震による土地の変化」 社「レポートにまとめよう」 家「くふうしよう」	国「読書座談会をしよう」	国「伊能忠敬」 社「政治について話し合おう」 家「わたしたちの生活と環境」	理「生物と地球の環境」

(2) 研究授業の単元計画と指導案の作成及び実践

各研究協力員は、3年間、所属校において学校図書館を活用し言語活動を充実させる授業の研究実践を行った（資料3）。実践に当たっては、年間4回の研究担当者会において、研究協力員、研究顧問及びセンター指導主事で検討を行った。

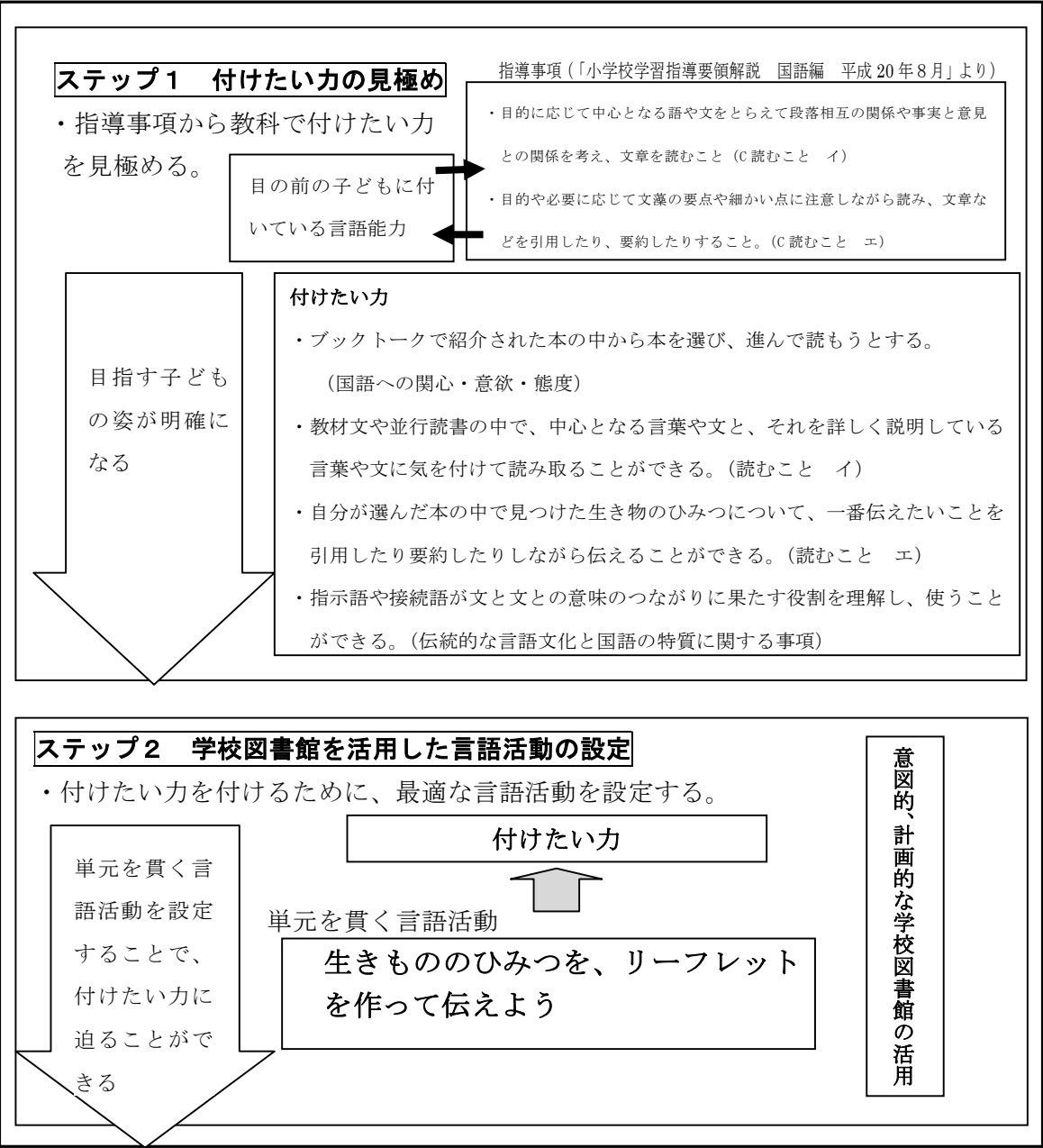
資料3 研究協力員による研究授業実践

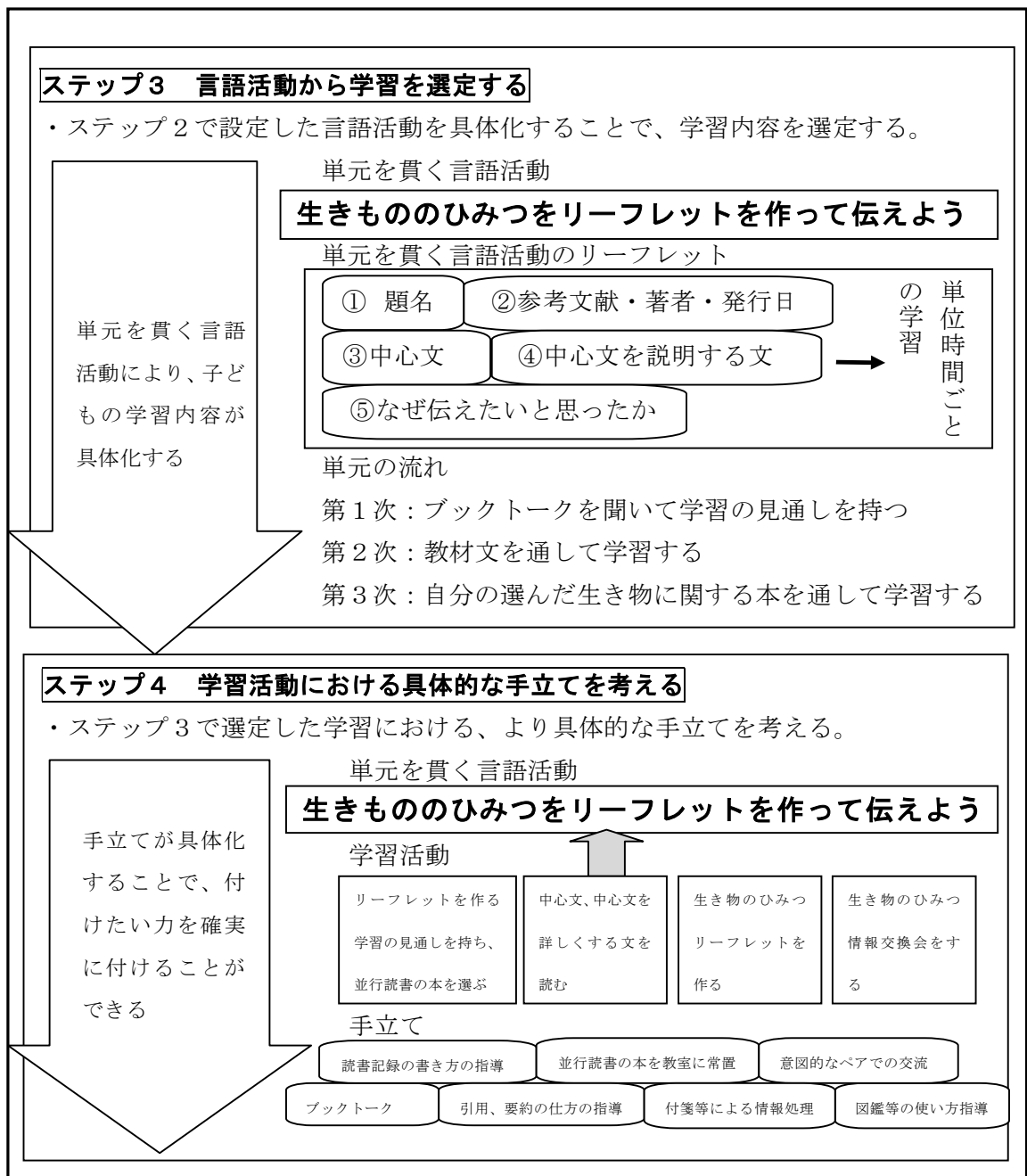
	単元名	学校・学年	研究成果の還元
23 年 度	本の世界を深める	島田市立大津小学校5年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	本のせかいをたのしむ	牧之原市立相良小学校1年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	読書会をしよう	藤枝市立藤枝中学校1年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	「大人になれなかった弟たちに・・・」	掛川市立城東中学校1年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
24 年 度	本のショーウィンドーを使って本のしょうかいをしよう	島田市立島田第五小学校5年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	日本語のひびきにふれる「短歌の世界」	牧之原市立相良小学校4年	センター主催「学校図書館活用で授業改善Ⅰ」研修における提案授業として公開 「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	「この人を語る」言葉の感覚を磨く	藤枝市立藤枝中学校2年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	「徒然草」の文章を読み、筆者の言いたいことやおもしろさを紹介しよう	掛川市立城東中学校2年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
25 年 度	じょうほうをもとめて読むー「生きもののひみつフリーレット」を作ろうー	島田市立島田第五小学校3年	「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	思いを見つめて読む「きつねのおきやくさま」	牧之原市立片浜小学校2年	牧之原市教育研究会学校図書館部研修会における提案授業として公開 「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	「高瀬舟」-論理的、多角的に考える-	藤枝市立藤枝中学校3年	センター主催「学校図書館活用で授業改善Ⅱ」研修において実践発表 「ふじのくにゆうゆう net」で公開
	読書生活をデザインしよう	掛川市立城東中学校3年	センター主催「学校図書館活用で授業改善Ⅰ」研修における提案授業として公開 「ふじのくにゆうゆう net」で公開

学校図書館を活用して言語活動を充実させるには、単元における子どもに付けたい力を見極めることが重要であると考え、授業構想を行った。始めに目の前の子どもたちがこれまで付けてきた言語能力と、学習指導要領の指導事項とを照らし合わせ、この単元における子どもに付けたい力を見極め、その力を付けるのに最適な言語活動を設定することが、言語活動を充実させ、主体的な子どもの学びにつながるのである。

授業者である研究協力員は、単元計画についての検討を重ねる中で、この教科で付けたい力を身に付けさせるためには、教科書教材のみではなく、日常的に多くの図書資料に触れることが必要であると考えた。また、豊富な図書資料は、ただ準備するだけでなく、本を介した交流等の工夫をすることや、学校図書館を活用した言語活動を単元の学習を通じて行うものとするすることで、教科のねらいを達成し、子どもたちがより主体的に学ぶことができる学校図書館活用授業となると考え、授業構想を行った。研究協力員の所属校である島田市立島田第五小学校での研究授業の構想を例に、構想のステップを次に示す（資料４）。

資料４ 授業構想のステップ（研究授業「じょうほうを求めて読む『生き物のひみつリーフレット』を作ろう」）





ア 学校図書館活用授業① 国語科 「じょうほうをもとめて読むー『生きもののひみつリーフレット』を作ろうー」（島田市立島田第五小学校 第3学年）の実践

(7) 授業指導案

学校名	島田市立島田第五小学校	実施日	平成25年9月21日
1 単元名	じょうほうをもとめて読むー「生きもののひみつリーフレット」を作ろうー (第3学年 国語科)		
2 本学習のねらい(付けたい力)	・ブックトークで紹介された本の中から本を選び、進んで読もうとする。【国語への関心・意欲・態度】 ・教材文や並行読書の中で、中心となる言葉や文と、それを詳しく説明している言葉や文に気を付けて、読み取ることができる。【読むこと(イ)】 ・自分が読んだ本の中で見付けた生きもののひみつについて、一番伝えたいことを引用したり要約したりしながら伝えることができる。【読むこと(エ)】 ・指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うことができる。		
	【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イー(ク)】		

3 ねらいを達成させるための学校図書館を活用した言語活動 ・自分で選び、読んだ本の中から見つけた生き物のひみつについてリーフレットを基に伝える。 リーフレットには読んだ本の情報を引用、要約して生き物のふしぎをまとめる。		
4 教材 「めだか」(教科書教材) 生きものの生態に関する本 35 冊		
5 単元の指導計画 (全 10 時間)		
	◆学習活動	○指導上の留意点 ★評価の視点
第 1 次	◆学習の見通しを持つ。(1 時間) ・ブックトーク「生きものってひみつがいっぱい」を聞く。 ・読書記録の仕方を知る。 ◆「本の仕組みを知ろう」を読み、目次や索引の利用の仕方を確かめる。(1 時間)	○生きものの生態を説明した本をブックトークで紹介することで、本との出会いをつくり、並行読書につなげる。 ○ブックトークで読んだ本の中で、疑問に思ったことや、もっと知りたいことを図鑑で調べることができることを知らせ、目次、索引の利用の仕方を確かめる。 ★ブックトークで紹介した本に興味を持ち、読書意欲を持つことができる。【国語への関心・意欲・態度】
第 2 次	◆教科書教材「めだか」を、めだかはどんな魚か考えながら読む。(1 時間) ◆めだかの「ひみつ」を読み取る。(2 時間) ・敵からの身の守り方 ・身を守るための体のしくみ ◆めだかの「ひみつ」を分かりやすく伝えるために筆者はどのような工夫をしているか考える。 (2 時間)	○大まかな内容をつかむ。 ○叙述を基に情報を読み取る。キーワードに着目し、生活経験と結びつけたり、言葉の表す意味を具体的に考えたりすることで、情報を正確に読むようにしたい。 ★キーワードに着目しながら大切な情報を読むことができる。【読む能力(イ)】 ○形式段落の確認をする。 ○筆者の書きぶりの工夫や段落相互の関係について目を向けていく。 ○問いの文(段落)の確認をする。 ○学習のてびきを参考に、段落、要点、内容をまとめた文、くわしい説明の文について確認をする。 ★中心文、中心文を詳しく説明する文の構成が分かる。【読む能力(イ)】 ★叙述に即して要点を取り出すことができる。【読む能力(エ)】
第 3 次	◆「生きもののひみつリーフレット」を作り、「生きもののひみつ」を伝え合う。(3 時間) ・生き物の「ふしぎ」を中心文、中心文を説明する文という形でリーフレットにまとめる。	○並行読書で読んだ本の読書記録を参考にし、紹介したい「生き物のひみつ」を決める。 ○情報を取り出した部分について、本に付箋を貼り、メモしておく。 ○リーフレットは[①題名②参考文献・著者・発行日③中心文(一番伝えたいこと、見出し)④中心文を説明する文⑤この「ひみつ」を伝えたいと思ったわけ⑥作成者の氏名]の 6 面。 ○差し替えができるように、画用紙を台紙にして、ワークシートをクリップで留めておく。全部が仕上がったところでのり付けする。 ★指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うことができる。【言語についての知識・理解・技能イー(ク)】

第 3 次	・「生きもののひみつ」情報交換会をする。(本時) ・「生きもののひみつ」を伝え合う。	○③④の部分を基に情報交換会をする。 ○情報交換をすることで、自分のリーフレットを見直し、推敲する。 ★交流を通して自分の考えをまとめることができる。【読む能力(エ)】 ○完成したリーフレット、読んだ本を基に友達と伝え合う。
6 本時の学習		
時間	◆学習活動と児童・生徒の反応	○指導上の留意点 ★評価の視点
5 分	・伝えるとき リーフレットは読まない。 自分が情報を取り出した本で交流する。 質問に答える。 ・聞くとき 必ず質問をする。(～ってどういうこと?) 相手が質問に答えられないときには一緒に調べる。	○交流の仕方について知る。 ○本時の流れについて知らせ、見通しを持つことができるようにする。 ○話合いが深まるように意図的に教師が組んだペアで交流する。 ○交流の意図を明確にする。(取り出した情報が聞き手にどう伝わっているのか、中心文とその説明が分かりやすいものになっているか確かめる)
20 分	◆ペアで情報交換をする。 ライチョウはオスとメスでなわばりあらしをするよ。わけは、巣を作る場所をきめるためだよ。なわばりを作り上げたオスは高い岩にのぼり、他のオスがなわばりに来るのをけいかいしているんだよ。  何でなわばりをつくるの? この本に書いてあるよ。 ライチョウは、自分のなわばりで子どもを育て生活するんだよ。  「なわばり」って何? うーん。説明するのはむずかしいなあ。 国語辞典で調べてみよう。 「なわばり」は自分のじん地の境目をきめること。自分の家はここからここだよと決めるようなものなんだ。 	○質問されたことは、リーフレットの推敲に生かすことができるよう、付箋にメモする。 ○ペアで情報交換をする。情報交換を始める前に、リーフレットの内容を確認し、リーフレットはしまう。自分が伝えたい情報を相手に話すときは、リーフレットを見ないで、自分の言葉で、本を示しながら伝える。 ○聞き手は疑問に思ったことを質問する。質問されたことは伝えたいことがより伝わるリーフレットにするために、付箋紙にメモしておき、後でリーフレットづくりに生かせるようにする。 ○質問に答えることができないときには、本を見直したり、ペアで考えたりする。 ○交替で情報交換をする。
20 分	◆リーフレットを完成させる。 ・題名を「きつねのくらし」にしていたけれど、題名から伝えたいことが分かるように「きつねのてき」にしよう。 ・コウテイペンギンのお父さんが足の上で孵化させるのは、お父さんの毛は、ふかふかで暖かいからということを説明にいれておこう。 ・「なわばり」について辞書で調べて分かったことを、自分の考えの中に入れておこう。	○情報交換を生かしてリーフレットを完成させる。 ○「くわしい説明の文」の部分を見直し書き加えたり、題名を差し替えたりし、自分の伝えたいことが伝わるリーフレットにする。 ○交流を踏まえて「このひみつを伝えたいと思ったわけ」の部分を書く。 ★自分が伝えたいことを分かりやすく伝えるためにリーフレットを見直すことができる。【読む能力(エ)】

(イ) 授業構想

・ 付けたい力を付ける授業構想

単元の第1次の学習では、普段なじみのない生き物の生態を説明した本を、ブックトークで紹介して本との出会いを作る。次に並行読書を行い、本で見つけた「生き物のひみつ」についてまとめた「生きもののひみつリーフレット」を作ろうと投げ掛けた。ブックトークとは、テーマに沿ってシナリオを作り、様々な本を順序よく紹介していく方法である。また並行読書は、同じ作者やテーマの本を複数冊授業と並行させて読み進めていく読書の手法である。このような導入により、単元を通して並行読書をする本と出会う場とするとともに、子どもたちが学習の見通しを持てるようにした。

単元の第2次の学習では、付けたい力の「読むこと（イ）」を付けるため、教科書教材を読み、「中心文」と「中心文を詳しく説明する文」を手掛かりにして文の構成を理解することを指導した。また、「読むこと（エ）」の力を付けるため、教材文「めだか」を通して、読み手に伝えるための筆者の工夫に目を向け、叙述に即して要点を取り出しながら教材文を読み進めた。さらに、第3次の学習では、教科書教材以外の自分で選んだ生き物に関する本を読み、第2次の学習で付けた力を生かすという授業展開で単元を構想した。

・ 図書資料の選定

島田第五小学校の3年生の子どもたちは、これまで生き物に関して知りたい場合は、写真とともに端的にその生き物の生態について記述されている図鑑を手にすることが多かった。今回の研究授業では、生き物の生態とともに、その生態の根拠となる事柄や生き物独自の生きる知恵等について順序立てて書かれている本を読むことで、第2次の教材文の学習で付けた、「中心文」と「中心文を詳しく説明する文」を読む力が生かされと考え、日本十進分類法の4類の生き物に関する本を使用することとした。

・ 本を介した交流活動への手立て

作成した「生きもののひみつリーフレット」（資料5）を使って「情報交換会」を行うことで、自分の作ったリーフレットを見直す機会とした。情報交換の際は、情報を取り出した本を使って「中心文」と「中心文を詳しく説明する文」を伝え合った。友達とのやりとりを生かして、分かりやすい「生き物のひみつリーフレット」にするために、交流するペアを意図的に設定した。そして、自分が伝えた情報が相手に分かりやすいものであるか確かめたり、分からないことは、ペアで一緒に調べたりすることを確認して交流を行った。

資料5 「生きもののひみつリーフレット」(授業者作)



(ウ) 子どもの表れ

・ 付けたい力を付ける授業構想による主体的な学び

授業者が教科のねらいを踏まえたブックトークを行うことにより、子どもたちは学習への見通しと関心を持って、本の紹介を聞くとともに、主体的に本を選ぶこと

ができた。さらに、紹介された本の中で疑問に思ったことやもっと知りたいと思ったことがあった場合には調べることができるように、図鑑等の使い方について知る学習を単元の導入段階に行った。子どもたちは、自分が関心を持った事柄について、更に調べたいことを図鑑等で調べ、生き物の生態についての情報を自ら取得し、次に生じた疑問について、再び図鑑等で調べるというように、主体的に学びを深めていった。また、普段読み慣れている9類（物語）以外の本に触れ、新しいことを知る楽しさを実感したことで、本から得た知識を友達や教師、家族に進んで伝えていた。

第2次の学習で、教材文「めだか」の教材を通して、中心文とそれを詳しく説明する文を読んだこと、筆者は読者に伝わりやすくするためにどんな工夫をしているかという読みの視点を持って読んだことが、第3次の学習における、並行読書をした本の読みでも生かされ、読み手に伝わりやすいリーフレット作りにつながった。

このように単元を貫く言語活動を設定したことで、子どもたちも学習の見通しを持つことができ、主体的、意欲的な学習を行うことができた。

・本を介した交流による思考の深まり

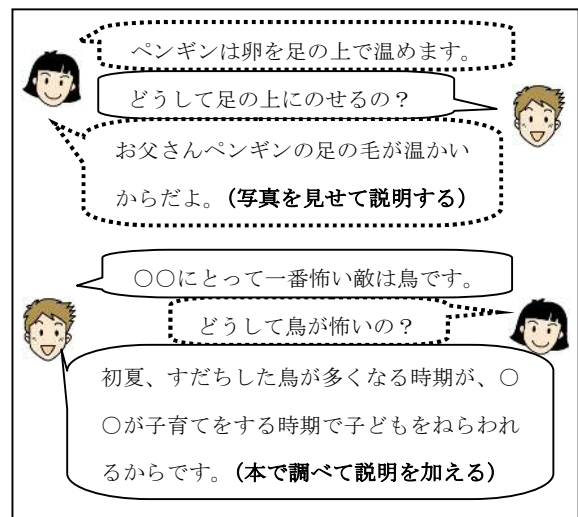
第3次の学習では、子どもたちは情報交換会を通して、友達から質問されたことで、伝えた内容の曖昧な部分を明確にすることができた。また、質問に答えるために再び本を読み返すことで、自ら調べるというように主体的に学び、中心文とそれを詳しく説明する文や言葉に気を付けて読むという力を確実に付けることができた（資料6）。

さらに、生じた疑問に対してこれまでの自分の知識や生活体験から、仮説を立て、本で情報を得ながら仮説を立証していく、というように本の情報と自分の持っている情報を行き来して、思考を深めていく様子が見られた（資料7）。そして、本を介した交流によって深められた読みを基に、リーフレットを見直し、「生き物のひみつ」が分かりやすくなるように改善することができた。

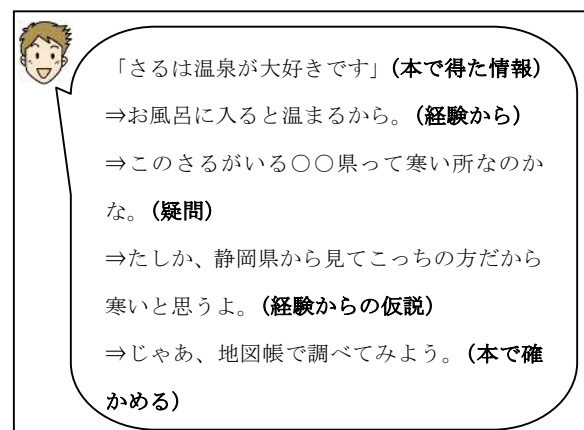
・並行読書による効果

並行読書により、普段手に取らない本に親しんだことは、子どもたちの読書の幅を広げるとともに、全体の読書量を増やし、日常的で豊かな読書習慣

資料6 「情報交換会」でのやりとり



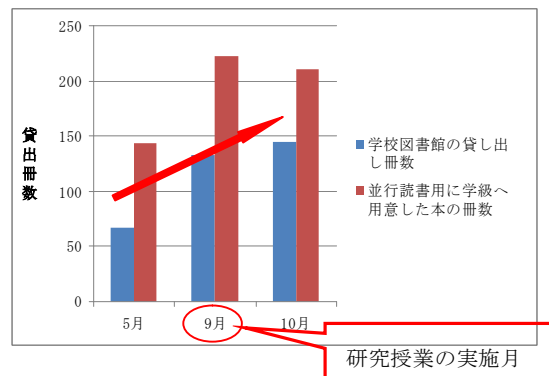
資料7 「情報交換会」での子どもの発言



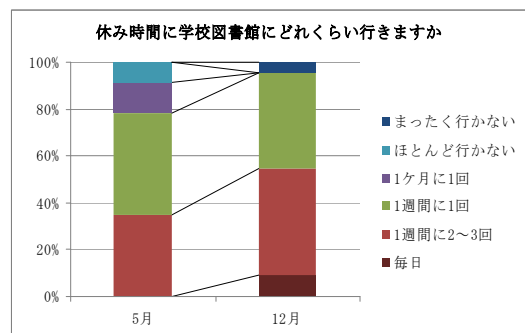
の形成につながった。研究協力員の所属する第3学年の子どもたちの貸出冊数について、年度初めの5月と研究授業を実施した9月、そして、その後の10月とで比較すると、並行読書を授業に取り入れ、授業に関連する本に数多く触れるようになると、子どもたちは学校図書館に行き自ら本を手にとった。その結果、学校図書館の借りる冊数が増えるという結果となった（資料8）。さらに、並行読書を取り入れた学習の後も、子どもたちの学校図書館の利用頻度は伸び、2学期の終わりの12月には、9割以上の子どもが1週間に1回以上学校図書館へ行くようになった（資料9）。

学校体制で、並行読書を授業に取り入れている島田第五小学校では、司書教諭である研究協力員が中心となり、並行読書で読んだ本の記録ノートの活用等、より効果的な学校図書館活用授業や読書指導について考える校内研修を重ねている。全校体制で研修することを通して、アンケートにもあるように、教員も子どもたちの読書の幅の広がりや主体的な学びの表れを実感している（資料10）。

資料8 並行読書用に学級へ用意した本の貸出冊数と学校図書館の本の貸出冊数（第3学年対象）



資料9 休み時間に学校図書館に行く回数



資料10 教員のアンケート調査より

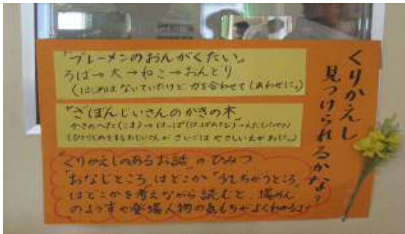
子どもたちの読書活動の様子から気づくこと

- ・国語の並行読書や教師の本の紹介により、読むジャンルが広がってきている。
- ・学校図書館を活用すると、学習が広がる。子どもたちも進んで、楽しんで取り組んでいる。
- ・読み聞かせした本やお薦めの本を学級の本棚に入れておくと、興味を持って読む姿が見られる。
- ・知っている作者の名前を耳にすると、他にも自分の知っている作者の作品を話題にするようになった。

イ 学校図書館活用授業② 国語科「思いを見つめて読む『きつねのおきゃくさま』」（牧之原市立片浜小学校 第2学年）の実践

(7) 授業指導案

学校名	牧之原市立片浜小学校	実施日	平成25年9月24日
1 単元名	思いを見つめて読む「きつねのおきゃくさま」（第2学年 国語科）		
2 本学習のねらい（付けたい力）	・自分の好きな本を見つけて、本への思いが伝わるように紹介しようとする事ができる。		

【国語への関心・意欲・態度】 ・登場人物の行動や会話から想像を広げて読むことができる。 【読むこと（ウ）】 ・文の中の主語と述語の関係に注意して、登場人物の行動や会話を読むことができる。 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イー（カ）】		
3 ねらいを達成させるための学校図書館を活用した言語活動 ・好きな本を選び、「お話小箱」を作って、自分のおすすめの場面とその理由が分かるように紹介し合う。		
4 教材 「きつねのおきやくさま」（教科書教材） 公立図書館から収集した繰り返しの構造を持つ本 70 冊		
5 単元の指導計画（全 16 時間）		
	◆学習活動	○指導上の留意点 ★評価の視点
第 1 次	◆「繰り返しのある物語」を読み味わい、お気に入りの本の「お話小箱」を作るという活動の見通しを持つことができる。  【読む意欲を高めるための掲示物】	○学校司書による読み聞かせやブックトークを通して、繰り返しが面白さの要因であることを確認する。 ○繰り返しの仕組みを捉えやすい物語をピックアップしておく。 ○これまで読んできた本の中で、短く分かりやすい物語を用い、「お話小箱」の作り方を共通理解できるようにする。 ○並行読書につなげる。 ★「繰り返しのある物語」を読み味わい、お気に入りの本の「お話小箱」を作るという活動の見通しを持つことができる。【国語への関心・意欲・態度】
第 2 次	◆「きつねのおきやくさま」を通読し、7つの場面構成をつかむことができる。（1時間） ◆「はじめ」「中」「終わり」を中心に、「場」の設定を出来事の展開に即してまとめることができる。（1時間） ◆出来事の展開に即して、きつねの様子や気持ちの変化を読み取ることができる。（3時間） ◆好きな場面の登場人物の行動や会話から、想像を広げて読み、「おすすめカード」を作ることができる。（1時間）	○「出会う人物」と「きつねのしたこと」を確認する。 ○繰り返されていく部分と少しずつ変わっていく部分を見付けさせる。 ○はじめ…主人公の紹介 中…①どんな出来事が起こるか②次にどんなできごとが繰り返されるか③クライマックス場面 終わり…それからどうなったかという作品の全体構造（物語のしくみ）をまとめる。 ○きつねの気持ちの変化を文中の言葉を手掛かりにまとめていく。 ○「太らせて食べよう→少しずつ揺れ動く気持ち→動物たちを大切に思う気持ち→勝ち目がないおおかみに立ち向かう勇ましさ→犠牲になって死ぬ」というきつねの行動や心情の変化を押さえる。 ○おすすめカードには、好きな場面・理由・思ったことを入れて書くようにする。

	◆きつねのおきゃくさまの「お話小箱」を仕上げ、友達と紹介し合う。 (2時間)	★好きな場面の登場人物の行動や会話から創造を広げて読み、「おすすめカード」を作ることができる。 【読む能力(ウ)】 ★文の中の主語と述語の関係に注意して、登場人物の行動や会話を読むことができる。【言語についての知識・理解・技能イー(ウ)】 ○友達が作った小箱や紹介の仕方の良いと思うところや、まねをしたいところを出し合い、第3次につなげる。
第3次	◆お気に入りの本の「お話小箱」を作ろう 自分が選んだ本について、好きな場面の登場人物の行動や会話から想像を広げたり、自分が既に持っている知識や経験、読書体験と結びつけて考えたりして、小箱に入れるカードを書くことができる。(3時間) ◆お話小箱を使って、友達にお気に入りの場面やその理由を伝えることができる。(2時間)(本時) ◆2年生の「お話小箱」コーナーを作ろう お話小箱を廊下に展示し、他学年にも紹介する。(1時間)  【「お話小箱」の児童作品】	○「お話小箱」に入れる物 ①自分のおすすめの場面とその理由が分かるカード ②「繰り返し見つけたよ」カード ③主な登場人物の人形(ペープサート)などを書いて入れるようにする。 ★自分が選んだ本について好きな場面の登場人物の行動や会話から想像を広げたり、既に持っている知識や経験、読書体験とも結びつけて考えたりして小箱に入れるカードを書くことができる。【読む能力(ウ)】 ○きつねのおきゃくさまで学んだ「繰り返しの構造」を意識して本に親しむことができるようにする。 ★「お話小箱」を使って、友達にお気に入りの場面やその理由を伝えることができる。【読む能力(ウ)】 ○「相手が読んでみたくなるような紹介をしよう」と呼びかけ、どんなことに気を付けて紹介したら、自分の思いを伝えられるのかを考える。 ○グループで相談しながら、もっと良くなる方法を考える。 ○友達のアドバイスを受けて、改良した「お話小箱」を展示する。 ○給食の時間に、食堂で全校の子どもたちに「お話小箱」を紹介する。
6 本時の学習		
	◆学習活動と児童・生徒の反応	○指導上の留意点 ★評価の視点
5分	◆本時の活動の留意点の確認と紹介の準備をする。	○友達の紹介する本について共に味わうことができるように、聞きたいことを質問したり、一緒に読み味わったりしてもよいことを伝える。

25 分 	◆ 個々が作った「お話小箱」を使って、選んだ本の紹介をしながらグループ内で交流し合う。 「どうぞのいす」のうさぎは、だれかのためにいすを作ったよ。人のために何かしようというところが好きだよ。	○おすすめの場面に、理由や感想を付け加えて紹介できるようにする。 ・自分が見付けた「繰り返しの構造」もカードにして、紹介する。 ・話し手の意図を考え、自分の感じ方と比べながら聴く。 ・おすすめの本をみんなで音読し、味わってみる。 ・聞き手は紹介された本について、もっと知りたいことや疑問に思ったことを質問する。
	「めっきらもっきらどおんどん」に出てくる、「もちのなる木」がすごくおいしそうなんだよ。 いいね。ぼくも遊んでいるときに、おもちを食べたいな。楽しいお話だね。一緒にめっきらもっきらのおまじないを読んでみようか。	○「お話小箱」の見た目がいいとか、絵が上手いとかではなく、お気に入りの理由や感想を伝えることが大事であると押さえる。 ○お気に入りの理由を話すことにより、その子ならではの読みを伝えることができることを押さえる。 ★お気に入りの場面や好きな理由をカードに書き、登場人物の行動や会話に着目して、想像を広げながら読むことができる。【読む能力(ウ)】
15 分 	◆ 振り返りカードを書いた後、感想や友だちのよかったところを全体で出し合う。 お話小箱作りは楽しいです。切ったり貼ったり書いたりしていろいろ考えました。〇〇くんの紹介した本を私も読んでみたいです。	○交流したことで新たな読みに気づき、追究意欲が高まったことを紹介し次時につなげる。

(イ) 授業構想

・図書資料の選定

学校図書館を活用して言語活動を充実させるためには、授業構想のどの段階でどのような図書資料を使用するかといった選書が重要となる。そこで、授業者は子どもたちの実態を踏まえ、この単元で付けたい力を付けるために学校図書館をどう活用するかを考えた。

教材文「きつねのおきゃくさま」は、繰り返しの構造を持つ物語である。このような構造を持つ物語は、昔話に多くある。これらは子どもたちにとって、展開が分かりやすく、先を予測できる安心感がある。また、繰り返していくうちに、主人公の気持ちや場面の展開が少しずつ変化していく、という特徴がある。この物語の特徴を生かし、「同じところはどこか」「少しちがうところはどこか」というように、物語の特徴である繰り返しの構造を読み取ることが、登場人物の気持ちを読み取ることにつながると考えた。そこで本単元の学習において、繰り返しの構造を持つ昔話を並行読書することとした。教科のねらいを達成させるための図書資料

の選書には、授業者だけでなく、司書教諭、いわゆる学校司書、公共図書館司書等が、それぞれ立場と役割を認識し、専門性を生かすことで、授業に活用できる図書を提供することができる。そしてこのことが、子どもたちがより主体的に本を手にし、学ぶ姿につながると考えた（資料 11）。選書に当たっては、研究顧問及び市内小学校の司書教諭、さらに学校図書館支援員（いわゆる学校司書）や市立図書館及び県立中央図書館の司書のアドバイスを

・付きたい力を付ける言語活動

主語と述語に注意して登場人物の行動や会話から想像を広げて読むという、第 2 次の教材文の学習で付けた力を活用するためには、第 3 次で、自分が選んだ物語を紹介する際、人物の気持ちや行動を表現しやすい、ペープサートが最適であると考えた。また、好きな本への思いを伝えたり、想像を広げて読んだりするという付きたい力を付けるために「くりかえしみつけたよカード」「そうぞうカード」「すきなわけカード」のような「おすすめカード」を書き、それらを入れた「お話小箱」を作成した。「お話小箱」を使い、お薦めの場面とその理由を紹介するという言語活動を行うことで、付きたい力を活用することができると考えた。

(ウ) 子どもの表れ

・言語活動による付きたい力の活用

「お話小箱」に入れたペープサートやおすすめカードを作る過程が、並行読書の際、物語の構造を押さえて読むことや、主語や述語に注意して、登場人物の行動や会話を読むことにつながった。お気に入りの場面を紹介する交流では、登場するぶたの顔が「さみしそうな顔」から「うれしそうな顔」に変わっていることに気付き、そのことを根拠にして、ぶたの気持ちの変化を「そうぞうカード」に記入していた。そして、友達にそのことを紹介する時には、物語の本文の会話文に戻り「いつもよりきれいだねって言われたから」というもう一つの根拠も挙げることもできた。また、お気に入りの場面の紹介を通して「3びきのやぎのがらがらどんの話と3びきのこぶたの話はにてるね」のように、構造が似ている物語が複数あることに気付く子どももいた。本を介して交流し合うことで、一層想像を膨らめることができたり、友達とのやりとりから、本の内容を再度確かめたりすることができ、教材文の学習で付けた読みの力を活用することができた（資料 12）。

授業の中で紹介し合うことを通して、自分が選んだ物語の内容を再確認すること

資料 11 研究授業の構想

単元名「思いを見つめて読む『きつねのおきやくさま』」

付きたい力

- ・自分の好きな本を見つけて、本への思いが伝わるように紹介しようとするができる。
- ・登場人物の行動や会話から、想像を広げて読むことができる
- ・文の中の主語と述語に注意して、登場人物の行動や会話を読むことができる。

繰り返しの構造を持つ昔話を並行読書

指導の重点

- ・繰り返しの構造を持つ様々な物語を読む
- ・これまでの知識や経験、読書体験と結び付けて読む

選書に携わる者の主な専門性

- 授業者：子どもの実態・教育課程を知る
- 司書教諭：学校図書館活用授業・本を知る
- 学校司書及び公共図書館司書：本を知る

ことができた子どもたちは、お気に入りの本の紹介に一層意欲を湧かせた。また、友達のアドバイスを受けてペープサート等を直し、想像を広げて読んだ本への思いが伝わる「お話小箱」に改善した。



・最適な言語活動による学びの広がり

改善した「お話小箱」は学校の図書コーナーに展示して、全校へ発信した。また、給食の時間を使って、食堂で全校の子どもたちに紹介したり、「お話小箱」を家に持ち帰って本の紹介をしたりした。その際の感想からは、図書資料を活用した「お話小箱」という最適な言語活動により、教科で付けたい力を付けるとともに、自分のお気に入りの本への思いが高まり、本の紹介への関心を持続させている様子がうかがえた（資料 13）。

資料 13 「お話小箱」を使った本の紹介を聞いた感想

「お話小箱」を使った本の紹介を聞いて

- ・ぼくが読んだことのない本をていねいに教えてくれていたのでもういいと思いました。好きな場面が、なぜ好きか、書かれていてよかったです。（5年生より）
- ・お話に合わせて絵を工夫してあって、とてもよかったです。お兄ちゃんも興味津々に聞いてくれました。（保護者より）
- ・「お話小箱」の絵が、動きがあって良いなと思いました。（兄より）
- ・（「おおきなかぼちゃ」のお話で）かぼちゃを動かすために、魔女から始まって、ミイラ、そして…と割りばしに紙をつけて作った登場人物を一つずつ動かしながら説明してくれました。ラップの芯を使うと「声が変わるよ」と魔女の声マネをしたら、魔女らしく聞こえました。ちょっとした工夫も気に入りました。（保護者より）
- ・みんな聞いてくれて、分かってくれたからうれしかったです。もっとしょうかいしたいです。（本人）

ウ 学校図書館活用授業③ 国語科「『高瀬舟』一論理的、多角的に考える」（藤枝市立藤枝中学校 第3学年）の実践 (7) 授業指導案

学校名	藤枝市立藤枝中学校	実施日	平成 25 年 10 月 4 日
1 単元名	「高瀬舟」 一論理的、多角的に考える一		(第 3 学年 国語科)
2 本学習のねらい（付けたい力）			
・ 人の生き方や社会について自分なりの意見を持ち、仲間との交流や読書を通して自分の考えを深めようとしている。 【国語への関心・意欲・態度】 ・ 文章を読んで人の生き方や社会について自分の意見を持つ。 【読むこと（エ）】 ・ 作品に使われている言葉について、それが書かれた時代、使い方や意味の違いを現在の言葉と比べながら読んでいる。 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イー（ア）】			
3 ねらいを達成させるための学校図書館を活用した言語活動			
・ 紹介された本の中から「名作」を見付け、作品中の登場人物の考え方や生き方を通して、人間とはどういうものか話し合い、作品の魅力について仲間に紹介し合う。			

4 教材 「高瀬舟」(教科書教材)「蜘蛛の糸」他 12 冊		
5 単元の指導計画 (全 7 時間)		
	◆学習活動	○指導上の留意点 ★評価の視点
第 1 次	◆学習の見通しを持つ。 ◆紹介された本の中から並行読書の本を選び、単元を通して読み進めながら自分が「名作」だと思う作品を見付ける。 ◆「高瀬舟」を読んで「庄兵衛」と「喜助」を通して、人間とはどういうものか話し合う。「高瀬舟」の魅力について話し合う。(5 時間)	○短編で生徒が読みやすいと思われる作品をブックトークで紹介する。 ○森鷗外、芥川龍之介の作品については、同じ作品で活字の大きい本も用意しておく。全国図書館協議会集団読書テキストも用意し、「字を読むことが嫌い」な生徒の抵抗を軽減させる。 ★作品に使われている言葉について、書かれた時代、言葉の使い方や意味の違いなどを現在の言葉と比べながら読むことができる。【言語についての知識・理解・技能イー(ア)】
第 2 次	◆自分が見つけた「名作」について、その作品のどこが良かったか、作品の魅力を書く。その作品に描かれている登場人物について自分の考えをまとめる。 ◆同じ作品を読んだ者同士で、登場人物について感じたこと話し合う。 作品中の登場人物を通して、人間とはどういうものか話し合う。 ◆自分が見つけた「名作」の魅力を仲間を紹介する。 ◆「名作」とは何か。学習を通して感じたことを書く。(2 時間)	○作品中の登場人物を選び、その人物のものの見方や考え方、生き方について自分の考えをまとめさせる。 ○ホワイトボードを用意し、グループで話し合った作品中の登場人物を通しての人間像を全体に発表させる。 ○前半、後半に分かれ、作品について語る、聞く立場を設定する。 ★人の生き方や社会の在り方について自分の意見を持って読むことができる。【読む能力(エ)】
6 本時の学習		
時間	◆学習活動と児童・生徒の反応	○指導上の留意点 ★評価の視点
7 分	◆自分が見つけた「名作」について同じ作品を選んだ者同士で登場人物について意見交換する。	○グループ内で全員が発言するよう、司会者には話合いの進め方を指導しておく。
33 分	◆作品中の登場人物を通して、人間とはどういうものか話し合う。	★人の生き方について自分なりの意見を持ち、仲間と交流して考えを深めようとしている。【国語への関心・意欲・態度】 ○グループで出た意見をホワイトボードに書き、全体に発表、提示することで多様な人間の生きざまに気づかせる。

人は不平等だよ。	人間だれもが努力は報われることを願って頑張っている  「好き」という気持ちがあれば努力次第で何でもできる。 ◆自分が関心を持った作品、グループの所へ自由に移動し、その作品の魅力を聞く。 	★人の生き方や社会について自分の意見を持つことができる。 【読む能力（エ）】 ○「自分が関心を持った作品について、グループに聞きに行く」「自分達が見付けた作品の魅力を紹介する」どちらの立場も経験させる。 大金を持った瞬間にぜいたくな暮らしをするって人間らしいよ。 大事なことは、金持ちになることでも仙人になることでもなく、人として正直な暮らしをするということに気付いたんだよ。
10 分	◆「名作」とは何か。「名作」について感じていることを書く。 ・「名作」とは人間らしさがよく出ている作品だと思う。 ・時代や状況は違っても悩むことは現代人も同じで、そこに共感できる作品が「名作」ではないか。	 【授業中とその後、教室に置いた本】

(4) 授業構想

・図書資料の選書

子どもたちに読書指導をする際、「読書の質」について考えなくてはならない。中学校では、教師の「読ませたい本」と生徒の「読みたい本」のずれが見られる。藤枝中学校での実践では、始めに学校図書館を活用した授業を通して、「読ませたい本」とはどんな本なのかについて考えた。そして、中学生という成長段階に合わせた「名作」と呼ばれる本、そして思春期という発達段階に合わせた本を選書した。選書に当たっては、これまで国語科の学習で取り上げた教材文の作者による他の作品や、静岡県読書ガイドブック『本とともにだち（中学生版）』（注3）等、既存の推薦図書リスト、研究顧問からの助言を参考にした。

・指導事項の系統性

研究授業の単元の学習で付けたい力を「人の生き方や社会について自分なりの意

（注3）静岡県読書ガイドブック『本とともにだち（中学生版）』

児童生徒が本に親しむためのきっかけ作りとなることを目的に作成し、県内全ての小学1年生、中学1年生に配布している読書ガイドブック。図書館の使い方や調べ学習の仕方等、また学年に応じたお薦めの本をジャンルごとに紹介している。

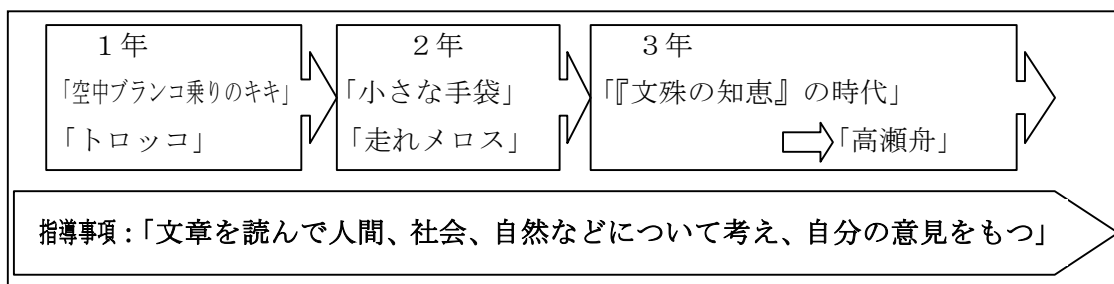
見を持ち、仲間との交流や読書を通して自分の考えを深めることができる」とした。

これは中学校学習指導要領の指導事項「読むこと（エ）」（第3学年）の「文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと」を受けて設定したものである。この指導事項に関しては、1年時に「空中ブランコ乗りのキキ」「トロッコ」、2年時に「小さな手袋」「走れメロス」を扱い、場面の情景や心情描写を捉え、登場人物の言動を通して、人の生き方や人間にとって大切なものを考えてきた。また、3年時になってからの既習単元『文殊の知恵』の時代』では「本を読むとは、その作者の知識、経験そして価値観に触れることである。名作とされている作品であるなら、世間の価値観に触れることになる。それを友達と話しながら、つまり友達の知識や景観や価値観に触れながら、読んでいく。こうして、本・友達・自分の三者の間で『文殊の知恵』を生み出す作業を始めることができるのである。」という説明文の学習を行った（資料14）。これまで読んだ作品で付けた力を踏まえて、『文殊の知恵』の説明文を読んだことを、子どもたちが「名作」と呼ばれる作品への関心を高めるきっかけとなったと授業者は捉えた。そして、教科書教材の『高瀬舟』以外にも「名作」と呼ばれる作品と出会い、友達とその価値観を交流し合うことで、他人の知識や経験を自分の知識や経験と結び付けて考える力を身に付けていくことが必要であると考えた。

・本を介した交流の手立て

単元の導入段階では厳選した作品をブックトークで子どもたちに紹介し、並行読書へとつなげ、名作について話し合う交流を設定した。これまでの3年間の研究実践の課題を踏まえ、交流が一方向的な発表ではなく、深まりを持てるようにするための工夫が必要と考えた。そこで、同じ本を選んだ者同士で交流のグループを設定し、友達とのやりとりを通して、人間の生き方や考え方についての価値観を交流することで、自分の考えを深められるようにした。また、話し合いの際はホワイトボード等に意見を書き出すことで、それぞれの価値観を可視化して話し合い、交流が深められるようにした。

資料14 指導事項の系統性



(ウ) 子どもの表れ

・単元を貫く言語活動の効果

単元の第1次の学習の中で教材文「高瀬舟」を「人間とは」という視点で読み進めたことが、第2次の学習において、自分が選んだ作品を読むことに生かされた。「高瀬舟」の学習で、「庄兵衛」と「喜助」のやりとりから人間のもろさと強さ、多様な生き方や考え方を読み、人間とはどういうものか話し合った。この学習を生かし「夏の葬列」を選んで読んだ子どもは、「人間とは「自分が第一と考えている」

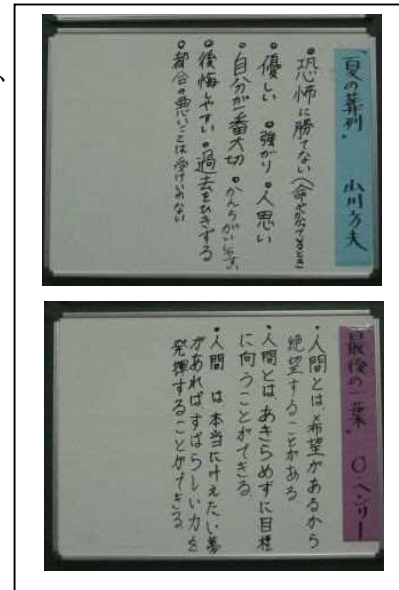
「自分が完璧と思いたい」「強がり」「後悔しやすい」のように自分の言葉で読んだことを表現することができた。また、「最後の一葉」を読み、病気の主人公に自分の経験を照らし合わせて、人間のもろさと強さについて読み、自分の考えを深めている子どももいた（資料 15）。

・本を介した交流による思考の深まり

教科書教材で得た力を生かして、図書資料から自分なりの 1 冊を選んで話し合うことで、子どもたちは積極的かつ主体的に本から得たことについて語り合うことができた。子どもたちは、共感できる考え方や自分とは違う考え方が明確になり、話合いが深まった。そして、「人間とは」について考えたことを話し合うことから、「名作とは」についての話合いへと発展した。

授業者は今回の研究授業を経て、読書に対する子どもたちの姿勢の変化を感じた。中学 1、2 年時は、部活動が忙しい時期でもあり、年齢的にも多感な時期でもあった。子どもたちが朝読書に読む本は、いわゆる「ライトノベル」といった読みやすい小説やスポーツ選手の自伝のような分野のものが多かった。今回授業で「名作」を読み、単元を貫く言語活動として、本を介した交流を行ったことにより、普段自分からは手に取らない作品を読み、考えを深めるという体験ができた。子どもたちから「とにかく読んでみなくちゃ名作であるか分からない」という声が聞かれたように、「名作」が子どもたちにとって遠い存在ではなくなったようである。さらに、交流することで、作品に書かれた時代や用語の意味等についての理解を深めることができるとともに、価値観の違いや、人間の生き方についての共通点に気付くこともでき、教科のねらいを達成させることにつながった。

資料 15 話合いで出た意見



エ 学校図書館活用授業④ 国語科「読書生活をデザインしよう」（掛川市立城東中学校第 3 学年）の実践

（7）授業指導案

学校名	掛川市立城東中学校	実施日	平成 25 年 6 月 21 日
1 単元名	読書生活をデザインしよう（第 3 学年 国語科）		
2 本学習のねらい（付けたい力）	・自分の読書傾向を読書記録や仲間と交流する中で振り返り、今後の読書生活を具体的に考えようとしている。【国語への関心・意欲・態度】 ・自分の読書傾向の分析や様々な本を手にとることを通して、本の選び方を考えたり、今まで読んだことのなかった分野の本を読んだりして、本を通して考えたことなどを友達に紹介し合い、今後の読書生活の計画を立てることができる。【読むこと（オ）】 ・第 2 学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字の大体を読むことができる。		

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ウー（ア）】		
3 ねらいを達成させるための学校図書館を活用した言語活動 ・ アンケート結果や読書記録を見直したり、他者の読書に関する話を聞いたりすることにより、今までの自分の読書傾向を振り返り、これからの「自分におすすめの本」を選び、読書生活の計画を立てる。		
4 教材 読書活動をデザインしよう（教科書教材） 学校図書館の本、公共図書館の本、個人の本		
5 単元の指導計画（全5時間）		
	◆学習活動	○指導上の留意点 ★評価の視点
第一次	◆学習の見通しを持つ。 ◆今まで自分が読んできた本を振り返ろう。（1時間）	○アンケート結果や読書記録により、今までの自分の読書傾向をつかませる。 ○友達と読んでいる本を紹介し合ったり選書方法を話し合ったりすることにより、読書の仕方や様々な本に興味を持たせる。 ★自分の読書傾向を読書記録や仲間と交流する中で振り返り、今後の読書生活を具体的に考えようとしている。【国語への関心・意欲・態度】
第二次	◆「味見読書」をしよう。（2時間） ～1週間ほど空ける～ ◆読書生活について考えよう。（1時間） ◆今後の読書生活について考えたことを紹介し合おう。（本時1時間）	○時間を区切って多くの本を読む「味見読書」により、様々な本に興味を持たせ、それを基に「自分におすすめの本」を選書させる。 ★第2学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字の大体を読むことができる。【言語についての知識・理解・技能ウー（ア）】 ○授業者や学校司書、外部講師といった、第三者の「本との関わり方」の体験やブックトークを聞かせ、今後の読書生活を考える上での参考にさせる。 ○「自分におすすめの本」を通して選書の理由や読書生活について考えたことを紹介させる。 ★本の選び方を考えたり今まで読んだことのなかった分野の本を読んだりして、本を通して考えたことを友達に紹介し合い、今後の読書生活の計画を立てることができる。【読む能力（オ）】
6 本時の学習		
時間	◆学習活動と児童・生徒の反応	○指導上の留意点 ★評価の視点
5分	◆「本との付き合い方」についてどう紹介したらよいか考える。	○ワークシートを見直し、選書理由や、これからの本との付き合い方について言えるようにさせる。
30分	◆友達と「本との付き合い方」を紹介し合う。（①意図的グループで②自由に）	○①選書理由を基に組んだグループで話し合わせる。 ②興味のある本を選んだ友達のところに自由に聞きに行かせる。

	 【廊下にも図書資料の一部を配置】	
	題名は前から知っていて、読んでみたいと思っていたんだ。 私は今まで読んだことのなかった分野に挑戦したよ。 本嫌いの自分でもこれなら読めた。これからはこの分野の本も読もう。 本を選ぶには情報が必要だ。だから本屋に行ったり、新聞で紹介されている欄を見たりしよう。	 【グループでワークシートと本を使った話し合い】 ○ワークシートを基に「この本を選んだ理由」と「これからの本との付き合い方」を中心に紹介させる。
15 分	◆友達との交流を通して読書生活について考えたことをまとめる。 仲間の読んでいた本がおもしろそうだった。次はその本を読んでみよう。 読書をする時間は少ないが、少しでも中身を充実させよう。	○友達の発言等を振り返らせる。 ★友達の紹介に興味を持ち、これからの自分の読書生活に生かそうとしている。【国語への関心・意欲・態度】 ★友達と話し合ったことを基に、これからの自分の読書生活を見つめ直すことができる。【読む能力(オ)】

(7) 授業構想

・子どもの実態を踏まえた授業構想

中学校での学校図書館活用授業及び読書指導を考える際、個々の生徒の読書歴による読書体験の差という課題に直面する。具体的には「読む生徒」と「読まない生徒」の2極化である。さらに、教師の「読ませたい本」と生徒の「読みたい本」が乖離しているという課題も加わる。昨今、中高生の不読者率の高さが課題となっているが、このような課題を考えるべく、学習指導要領に対応した新しい教科書では、中学校の教科書教材として、子どもたちが自身のこれまでの「読書生活」を振り返り、今後の「読書生活」をデザインするという単元が加わった。

読書は個々の営みであり、教科の学習とは離れた存在にあるという認識が、教師にも子どもたちにもあったかもしれない。このようなこれまでの読書に対する考え方の実態から、授業者は、読書が読者へ与える効果について、子どもたちに改めて考えさせることが、本単元の授業構想の柱であると考えた（資料16）。

単元の始めに3年生を対象に読書に関するアンケートを取り、読書の実態を探った。結果は、読書に関しては、65%が「好き」と回答しているものの、「どちらでもない」という回答が、29%に上った。「どちらでもない」理由としては「自分の

好きな本を読むのはよいが、指定されるのは嫌」「長編は嫌いだが短い話は好き」というように読書に関して偏りのある回答が見られた。一方で「自分が読みたい本、合っている本がない」のように、どんな本を読んだらよいのか分からない実態も、浮き彫りになった。そして、「友達に読書のことで聞いてみたいこと」については「どうしたらたくさん本を読めるのか」という回答があった。これらのアンケート回答からは、城東中学校の

子どもたちは、読書は嫌いではないが、どのような本を読んだらよいか、どのような本が自分に合っているか模索していることがうかがえた。

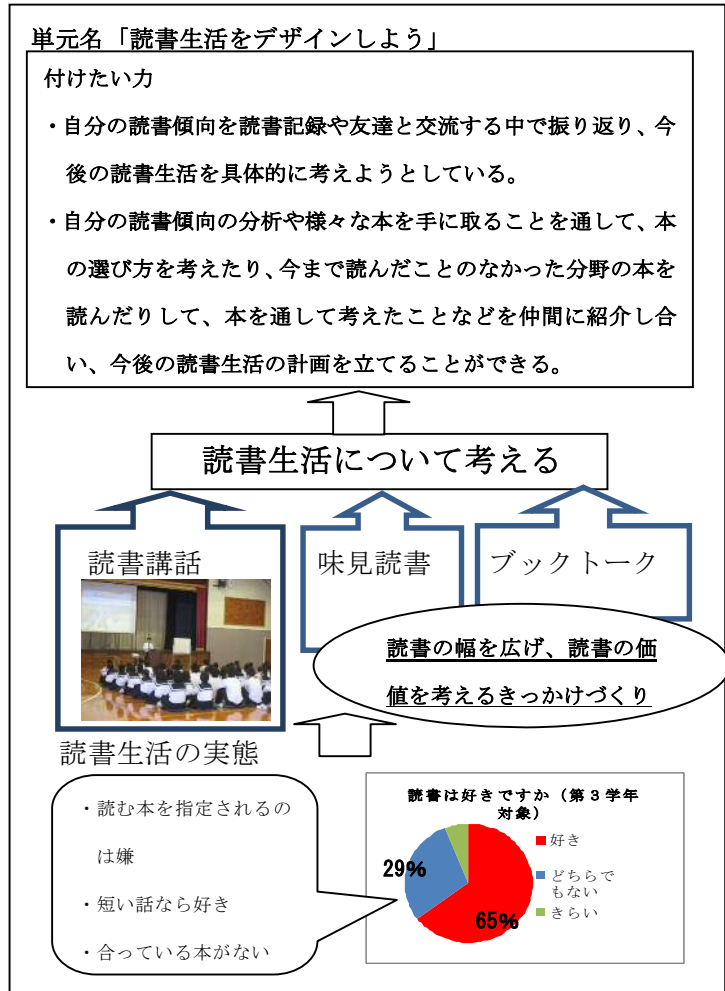
・単元を貫く言語活動への手立て

子どもたちの実態と指導事項から付けたい力を設定した上で、本単元での言語活動を「読書生活について考える」と設定した。そして、言語活動が単元を貫いたものとなるように導入段階では、様々な立場の者からの読書体験やお薦めの本についてのブックトークを聞くことで、読書スタイルや読む本の多様性に気付かせ、改めて自分の読書生活について考えるきっかけにしたいと考えた。また、読

む本が9類の小説等に偏ることなく、あらゆるジャンルの本に親しみ、読書の幅を広げる機会を作るために、単元の展開段階では、少しずつ複数冊を試し読みする「味見読書」の手法を使って、より多くの分野の本を「試し読み」する体験を学習活動に取り入れた。「味見読書」に使用する本は学校司書が公共図書館等と連携して、多くのジャンルの本を複数冊用意した。

また、中学3年生の時期に読書生活を考えるということは、自分の生き方を考えることにもつながる。そこで、より様々な立場の人から読書体験やお薦めの本の紹介を聞き、読書を自分のこととして主体的に考えるために「読書講話」の機会を設けた。「読書講話」では、講師を学校に招き、3年生全員が読書に関する話を聞いた。読書家でもある講師からは、自身の生活の中で読書から得たものの大きさについて考えたことや、これまでの人生の中で岐路に立った時や悩んだ時に本を読むこ

資料 16 研究授業の構想



とで、人生の指針となった体験についての話を聞くことができた。

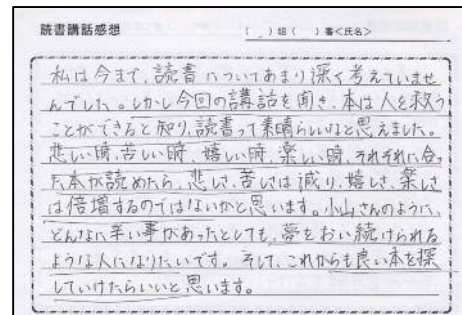
そして、単元の第1次の学習で「味見読書」をした中から、次に自分が読む1冊を選び、単元の第2次の学習では「この本を選んだ理由」と「これからの本との付き合い方」について考え、友達と交流した。

(イ) 子どもの表れ

・単元を貫く言語活動の効果

自分の読書生活を考える機会を得た子どもたちは「本を読むことで自分の気持ちを変えることができ、本の力ってすごいなと思いました」「自分の人生が変わるような1冊を探していきたいです」「私も本を通して自分の世界観を広げていきたいです」等、読書生活そのものや、自分の生き方についてより意欲的に考えるような感想を持った。中学3年生というこれからの進路や生き方について考える時期であるからこそ、他者の考えを客観的に受け入れて、読書について自分のこととして考えることができた（資料17）。

資料17 読書講話の感想



単元の第1次の学習で「味見読書」をした中から、次に自分が読む1冊を選び、「この本を選んだ理由」と「これからの本との付き合い方」について考え、友達と交流し合った。今回の授業は、「どの本を読むか」ではなく、「どのように本を読むか」について考えるという、子どもたちにとっては、これまで体験したことのない学習であった。多くの友達の読書生活についての話を聴いた子どもたちは、部活等で時間がなくても、読書に親しむ時間の持ち方について考えたり、読書に対して苦手意識があっても、読めそうな本の分野や読み方に気付いたりすることができた。

・子どもたちの読書生活の変化

今回の研究授業を終えて、生徒たちの生活日記の中に「この本読んでみてください」といった読書に関する記述が見られるようになった。また、授業後のアンケートでは、学校図書館に行くことが好きな理由に「新しい本がすぐに読める」や、「値段の高い本でも手に取って読める」という声があった。これらは、今後の読書の仕方や学校図書館の利用の仕方について気付いたことの表れであると考えられる。また、研究授業後、学校図書館の貸し出し冊数が増えるとともに、子どもたちはこれまで読まなかった9類の文学以外の分野の本も、借りて読むようになった（資料18・19）。

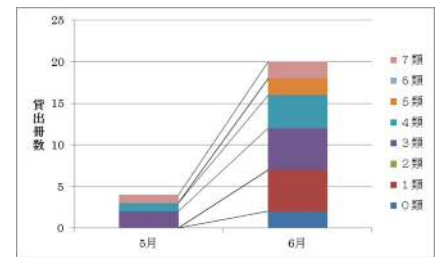
「今後の読書生活を考える」という言語活動を単元を貫いて行ったことで、読書の意義や必要性について考え、毎日の朝読書で読む本や学校図書

資料18 類別貸出冊数の変化
(冊)

	5月	6月
0類	0	2
1類	0	5
2類	0	0
3類	2	5
4類	1	4
5類	0	2
6類	0	0
7類	1	2
8類	2	4
9類	26	87
計	32	111

研究授業
の実施月

館の利用等、日常生活の中での読書を具体的にイメージし、実践しようとする意欲を持つことができた。



(3) 研究授業以外における学校図書館を活用した授業の単元計画及び実践

本研究における研究授業は、各研究協力員が、国語科での実践を中心に行ってきた。国語科において、「言語感覚を養うことは、一人一人の児童の言語生活や言語活動を充実させ、ものの見方や考え方を個性的にすることに役立つ。こうした言語感覚の育成には、多様な場面や状況における学習の積み重ねや、継続的な読書の時間などが必要であり、そのために、国語科の学習を他教科等の学習や学校教育全体に関連させていく工夫も大切である（『小学校学習指導要領解説国語編』文部科学省）とされている。そのため、本研究では、1年次は、学校図書館を活用した授業実践を国語科で積み、2年次以降は研究協力員の取組を、その所属校において他の教職員や他教科における全校体制の実践へと広めていった。以下は、国語科における並行読書を取り入れた実践及び、理科における図書資料を活用した授業の実践である。

ア 国語科における並行読書を取り入れた実践（島田市立島田第五小学校）

島田第五小学校では校内研修のテーマを「わかる喜びを味わい 自ら学びを追求する子の育成」とし、全学年で国語の授業の中で並行読書を取り入れ、学びを深めている。年度初めに研究協力員が所属する学年である第3学年で授業に並行読書を取り入れ、校内研修会で全校への取組に広げた。そして、年間を通して各学年で複数回並行読書を授業に取り入れた（資料 20）。

資料 20 授業で行った並行読書の実践記録（一部）

月	教材名	学年	並行読書の本のテーマ
5	『けしゴムころりん』	3	登場人物はどんな子かについて考える
9	『けんかした山』	1	起承転結のはっきりしている話
	『一つの花』	4	主人公の気持ちが大きく変化する話
	『大造じいさんとガン』	5	椋鳩十・シートンの作品、物語の山場を読む

並行読書に使用する図書はその単元の学習の間、教室に常置した。こうすることで、子どもたちは授業だけでなく、休み時間等気になった時に本を手にしていった。そして授業での学びをより深めたり、授業で付けた力を、活用したりしながら付けたい力を確実に身に付けることが可能となった。さらに、情報として取り出したページには付箋を貼っておくことで、いつでも自分の取り出した情報を引き出したり、そのページを開いて友達に紹介したりしていた。子どもたちは本から知識を得、分かったという喜びを味わうとともに、分かったことを交流し合うことを通して理解を深めていった。

イ 理科における図書資料を活用した実践

(7)「天気の変化」（牧之原市立片浜小学校 第5学年）

授業で使用する雲に関する本は、公共図書館に団体貸出の依頼をして収集した。学校司書が、教科の学習に関連したページに付箋を付けたり、本だけでなく雲に関連した情報を集め、コピーして提供したりしたことで、子どもたちは様々な資料から必要な情報を意欲的に取り出すことができた。また、本で調べたことから関心や疑問が湧き、本の活用と並行して、インターネットの動画で雲の動きについて調べた。本から基礎的で確かな情報を取得し、新しい情報や動画はインターネットで取得するというように、本とインターネットの双方の良さを生かすことで、個々の子どもの学習に対応することができた。調べた事柄（雲の種類、雲記号、雲の高さや性質等）については、手作り新聞にまとめ、学習したことを学校全体へ発信した。

(イ)「電流」(藤枝市立藤枝中学校 第3学年)

電流の学習で、電池を並列につなぐと電力が大きくなることを確かめる実験を行い、その理由を探るために学校図書館の本を活用した。授業者が「豆電球の構造」「電流を流す物質」「電球のしくみ」といったテーマの本を学校司書に選書の依頼をし、揃えた。実験したことを教科書だけでなく、多くの図書資料を使って調べること、子どもたちの知識の定着と追求が図られた。また、多様な図書資料を使う際に出てくる分からない言葉は百科事典等の他の資料を使って新たに調べるというように、図書資料を通して調べ学習が深まっていった。

(ウ)「植物の観察」(掛川市立城東中学校 第1学年)

授業者は学校司書に植物の観察をするので図鑑を揃えてほしいことと、特に葉の形や花の色・形等に注目して観察ができるというように授業のねらいに関することも含めて選書の依頼をした。学校司書は依頼があった本を学校図書館だけでなく公共図書館からも揃えた。授業のねらいを詳細に伝え、それに合わせた図書資料を揃えたことで、生徒たちにとって、手に取りやすく、教科のねらいに迫る資料となった。さらに、図書資料を随時使えるように理科室に常置したことで、生徒たちは疑問が生じた時や確かめたい時に主体的に図書資料を使い、学びを深めることができた。

自然科学について学ぶ理科では、興味・関心を高めたり、実験や観察によって得られた結果の根拠等を更に深く理解したりするために、図書資料の活用が効果的である。実験や観察と本での調べ学習とを往復することで、子どもたちは意欲的に学び、知識を深めていくことができた。

(4) 学校図書館を活用した読書指導の実践

ア 子どもたちが本を手取るための工夫

学校図書館の機能は、「従来より、児童生徒の「読書センター」機能及び「学習・情報センター」機能という二つの柱を持つものと捉えられてきた。この二つの機能の発揮を通じて、学校図書館は「学校教育の中核」たる役割を果たすよう期待されている。」(「これからの学校図書館の活用の在り方等について」子どものサポーターズ会議)とされている。これらの機能の充実を図り、子どもたちが利用しやすい学校図書館、子どもたちにとって居心地の良い学校図書館を目指して、研究協力員の所属校で

は学校図書館の改造を行った。

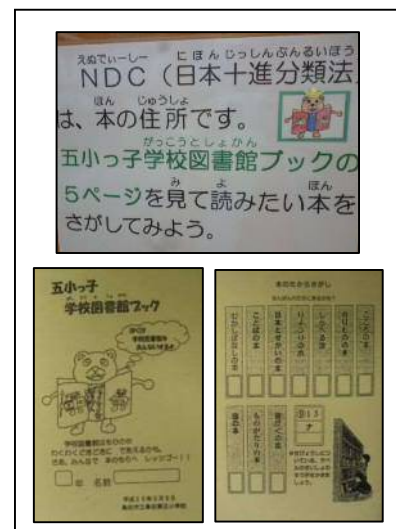
島田第五小学校では、学校図書館の機能の充実に向け「こんな学校図書館にしたい」という思いを教職員で共有した。そして、学校図書館のリニューアルの作業計画を立て、職員全員で本の搬入作業等を行い、学校全体で学校図書館の機能を理解して作業を進めた。開館の際は、全校集会でオープニングの式を行い、学校図書館の機能について、校長から分かりやすく子どもたちに説明をした。その後、学校図書館には一日平均 70 人の子どもたちが来るようになった。秋の読書週間には、図書委員会主催のイベントを行った。「本棚に本をそろえよう」というイベントでは、模造紙に描かれた本棚に読んだ本の書名カードを、分類を考えながら置いていった。これは、子どもたちが本の分類や配架について知ることで、調べ学習等で必要な情報活用能力を高めるとともに、様々なジャンルの本に親しむきっかけとなった。

新しく利用しやすくなった学校図書館は、子どもたちにとって「いろいろなことが知ることができる場所」だけでなく「楽しく過ごせる場所」となり、読書をあまり好まない子どもにとっても、足を運びたくなる居心地の良い場所となった。

子どもたちが、自ら本を手取るようにするためには、学校図書館の改造に加えて様々な工夫が必要になる。その一つは学校図書館の図書資料の配架整備である。日本十進分類法による配架で整備し、年度初めの図書館ガイダンスで図書館の配架の仕組みや分類について学ぶことで、子どもたちは必要とする本を自ら手取ることができる。研究協力員の所属校では「学校図書館マップ」を掲示したり、手作りの「学校図書館ブック」を全員に手渡したりして、子どもたちがいつでも学校図書館の本を自分で探すことができるように工夫をした（資料 21）。図書の分類について知ることは、自ら本を探すことができるだけでなく、公共図書館の利用にもつながり、生涯にわたって読書に親しむ習慣づくりとなると言える。

また、教科書に掲載されている作家の本や教科や領域の学習、学校行事に関する本、さらに季節や年中行事等に関する本等、テーマごとに本をディスプレイすることで、子どもたちは普段手に取らないような本に興味・関心を持つことができた。授業で学校図書館の本を活用した場合には、学習活動で作成した作品も、子どもたちが本を手取るための貴重な資料となる（資料 22）。これらを本と共に展示することで、子どもたちは作品に取り上げられた本や、異学年の学習への関心を高め、以前より学校図書館に足を運ぶようになった。（資料 23）

資料 21 本の分類と配架を知る掲示と「学校図書館ブック」

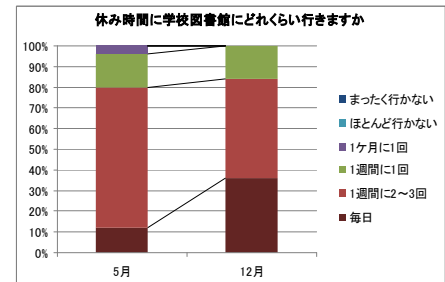


資料 22 学校図書館に本と共に「お話小箱」を展示



資料 23 休み時間に学校図書館行く回数

(牧之原市立片浜小学校全児童対象)



また、学校司書が学校図書館にいて興味を持った本と一緒に探したり、薦めたりすると、子どもたちは、その本を借りたり、次に読む本の幅を広げたりもした。

イ 意図的、計画的な読書指導

研究協力員の所属校では、学校図書館の学年に応じた利用指導を、毎年、年度初めに行った。特に学校司書と授業者とのチームティーチングでの利用指導では、学校司書から分類や配架の仕組みについて学ぶことで、授業で学校図書館の本を活用する際、自ら本を探することができるだけでなく、公共図書館の利用にもスムーズにつながることができ、生涯を通じて読書に親しむ姿勢の基盤づくりにもなった。

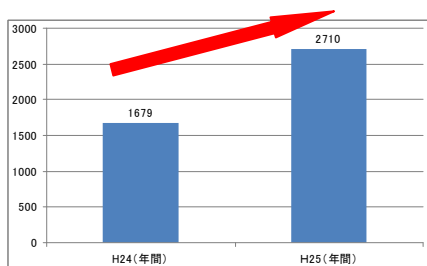
読書に親しむ基盤ができた子どもたちは、ますます主体的に本に親しむようになった。藤枝市立藤枝中学校では、学区の小学生に読み聞かせを行っている。一生懸命練習をした後に、小学生の反応を気にしながら読み聞かせを行う中学生たちは、読む読書の喜びから、読み聞かせる読書の楽しみを十分に味わうことができた(資料 24)。これらの読書指導により、子どもたちはより主体的に読書に親しむようになり、学校図書館の貸出冊数も学校全体で伸びが見られた(資料 25)。

資料 24 読み聞かせの感想(藤枝中学校)

中学生による小学生への読み聞かせ

- ・「小学生は喜んでくれるか」「しっかり聞いてくれるか」「かまないで読めるか」いろいろな感情がこみ上げてきた。題名を読んでから最後の行まで心をこめて読むことができた。感想では、「一生懸命読んでいたのが伝わってきた」「楽しい時間を過ごせた」など声が上がり、すごく満足してくれてうれしかった。しかし、今回の読み聞かせで自分が一番幸せになれば、少し成長できたと思う。(中学生)
- ・話す時、少しずつ声を変えていて、お話がしっかり分かり、本もみんなに見えるような位置で読んでくれたのでとても楽しかったです。私も中学生になって読み聞かせをする時があったら、このような工夫をして読んでみたいです。(小学生)
- ・「にじいろのさかな」は家にあって何回も読んだことがあるけど、お姉さんが読んだら新しいお話になっていてすごいいいと思いました。(小学生)

資料 25 学校図書館貸出冊数 (藤枝中学校全生徒対象)



授業と連動させて読書指導を行う際、学校図書館の所蔵する資料だけでは、授業に使用する図書資料を十分賄えない場合が多い。研究の2年次からは、研究授業等において使用する図書資料を公共図書館から団体貸出をして収集した。

城東中学校における研究授業『徒然草』の文章を読み、筆者の言いたいことや面白さを紹介しよう」の学習では、学校図書館と公共図書館から30冊ほどの図書資料を団体貸し出しして活用することで、写真資料や現代語訳を複数比較することができ、子どもたち一人一人が、作者吉田兼好の人生観に迫ることができた。また、学校図書

館活用年間計画に従って、学校図書館を活用した際に使用した図書資料についてはリストにし、計画的に学校図書館の所蔵本として購入し、揃えていくことで、学校全体での継続的、系統的な学校図書館活用につながった。

2 分析と考察

3年間の研究では、研究協力員がその所属校において、授業及び読書指導で学校図書館を意図的、計画的に活用してきた。それぞれの所属校では、これまで挙げてきたような子どもたちの表れが見られた。これらの表れから、学校図書館の活用の効果について分析と考察をする。

(1) 学校図書館を活用した言語活動の充実

学校図書館を活用した授業という、教科書以外の図書資料を読む時間の確保や、言語活動は何にするかということが注目されがちであった。本研究においても、1年次は言語活動が単元の終末に単発的に設定されたものであったり、図書資料の活用の意図と付けたい力との関連が不明確であったりした。このような授業では教科で付けたい力が子どもに確実に付いているかを捉えることはできなかった。そこで、3年間の研究を経る中で、研究の2年次、3年次は、教科のねらいと子どもに付けたい力をしっかりと見極めた授業を構想して言語活動を充実させることに重点を置いた。以下に、言語活動の充実について明らかになった点を挙げる。

ア 付けたい力を確実に付ける言語活動

授業構想の段階では、目の前の子どもに現在付いている言語能力は何か、これまでの学習で付けてきた力は何かを考え、本単元で付ける力を学習指導要領の指導事項から見極めた上で、付けたい力を付ける言語活動を充実させるための手立てを考えた。特に、図書資料の選定と、本を介した交流等、学習における有効な手立てを一つ一つ吟味した授業構想により、言語活動が単元を貫いたものとなるとともに、教科のねらいが授業者にも子どもにも明確になり、付けたい力が付いたかを活用の場面でしっかりと捉えることができるようになった。

例えば、付けたい力を付ける言語活動として、片浜小学校では、ペープサートを使って、登場人物の会話や行動を表現し、読んだ本から想像を膨らめてお気に入りの場面を紹介するという活動を設定した。教科書教材の学習で付けた力を、教科のねらいを付けるために選書された、繰り返しの構造を持つ物語を読んで活用するという単元を貫いた言語活動により、子どもたちは学習への関心を持続させながら、身に付けた力を活用し、より確実に身に付けることができた。

イ 言語活動を支える図書資料の選定

教科で付けたい力を確実に付けるための言語活動において使用する図書資料は、付けたい力と関連させて選書しなくてはならない。例えば、授業と並行して図書資料を読む場合、付けたい力に迫ることのできる作品を選んで読むことで、子どもたちにとっては、教科のねらいが焦点化し、これまで学んだ知識等を活用することが可能となる。島田第五小学校では、教科のねらいと子どもに付けたい力を反映させた息のmのに関する本を選書し、並行読書したことで、教科書教材で得た、「中心文」と「中心文を説明する文」を読むという力を活用して、図書資料を読むことができた。そして、

生き物の生態とその根拠とのつながりを関連させて読んだことを、「生きもののひみつリーフレット」に効果的に生かすことができた。このように、教科のねらいを反映させて選書された様々な図書資料を読むことにより、子どもたちはこれまでの学習や経験から得た自分の知識や理解したことを活用して、付けたい力を確実に身に付けることができたのである。

(2) 学校図書館を活用した言語活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成及び主体的、意欲的な学びの育成

ア 学びの深まりによる思考力・判断力・表現力の育成

学校図書館を活用して言語活動を充実させた授業では、図書資料を読むことにより得た知識を根拠にして自分の考えを述べることができた。さらに、友達と本を介して考えを交流し合う中で、曖昧であったり、疑問に感じたりしたことを調べて、思考、判断、表現を繰り返しながら、付けたい力を、活用することで確実に付ける姿が見られた。

島田第五小学校の実践における「生き物のひみつの情報交換会」では、図書資料を活用し、生じた疑問について本で調べて学びを深めることができた。様々な図書資料の活用をしたからこそ、子どもたちの説明の仕方や考えに多様性が生まれ、話し合うことで考えを比較、共有し、更なる学びの深まりが見られた。また、藤枝中学校では、本を介して人間の生き方について考える交流において、他者との考え方の共通点や相違点に気付いて、自分の考えを深めるという学びが見られた。このような学びは、教科書教材で得た力を生かすべく、さまざまな図書資料を活用し、本を介して、思考し、判断し、表現する。そして再び、本を読んで思考するという学びのサイクルを経て、深めることができたと言える。

イ 学びの広がりによる主体的、意欲的な学びの育成

城東中学校における実践では、子どもたちは、多様な図書資料を主体的に読み、新しい知識を得たことに喜びを感じたり、思考を繰り返すことで達成感を味わったりしながら読書生活について語り合うことができた。教科書以外の図書資料は、教材文のように子どもたちの発達の段階に応じて必要な部分だけ厳選された文章とは違う、いわば「生きた情報」である。だからこそ、これらの情報を読む時には、自然と情報を取捨選択し、判断しながら読み進めることが求められる。そうやって読むことで、子どもたちは、「知りたい」「学びたい」というように、教科書教材で身に付けた力を活用することへの意欲を高め、関心を持続させながら学習することができるのである。

授業における図書資料を活用した学びの達成感は、学校図書館の貸出冊数の伸びや子どもたちの声からも見られるように、積極的な読書や、本を介した他者との交流といった、その後の主体的な学びへ広がった。また、家庭で本について話題にしたり、異学年に読み聞かせをしたりというように、日常的に、主体的に読書に親しむ子どもの育成にもつながった。

以上のような、思考力・判断力・表現力の育成及び主体的、意欲的な学びの育成は、学校図書館の図書資料を活用して付けたい力を付けるための言語活動が単元を貫いたも

のとして充実し、教科で付けたい力を反映させた図書資料を活用することでこそ得られた効果であると考える。

V 研究のまとめ

3年間の研究実践を経て、学校図書館を活用して、教科のねらいを達成させる言語活動を充実させることで、子どもたちに付けたい力が身に付き、思考力、判断力、表現力が高まるとともに、主体的な学びを育むことができた。学校図書館を活用した授業を考えることは、効果的な図書資料の活用についてのみ考えることなく、子どもに付けたい力を付ける授業を考えること、つまり子どもたちの「生きる力」を育む授業を考えることになる。今後は、更なる授業改善につなげるために、確実に付けたい力が付いたかについての評価及び評価を生かした指導につなげていきたい。

さらに、授業以外の場でも読書指導による子どもたちの読書基盤の形成が主体的な学びを支えるということが実践から見えてきた。読書の基盤づくりには、授業者や学級担任だけでなく司書教諭や学校司書、公共図書館、学校図書館ボランティア、そして何より学校の教職員全体の子どもの読書に対する共通認識の下、継続的に読書指導が行われることで、一層の効果が得られる。これからの学校図書館活用及び読書指導は、学校そして地域全体で、子どもたちの生涯にわたる読書を支えていく取組が必要であり、効果的な連携や効率的な取組についても、今後研究を進める。

本研究において、各研究協力員は司書教諭として、学校図書館を活用した授業の授業者として、授業改善という視点で研究を行った。その実践が研修会等を通して学校から各市町へ広がることにより、学校図書館活用についての理解が県内教職員に浸透しつつある。今後も、研修、研究等を通して学校図書館活用及び読書指導についての理解啓発のための広報と発信を計画的、継続的に行い、学校図書館の活用に関わる全ての教職員全体の取組を支えていきたい。

【参考文献】

- ・『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改訂について』（中央教育審議会答申）www.mext.go.jp
- ・『人の、地域の、日本の未来を育てる読書環境の実現のために』（国民の読書推進に関する協力者会議）www.mext.go.jp
- ・「ふじのくにゆうゆう net」 <http://www.fujiyuyu.net/>
- ・『学校図書館法』（文部科学省）www.mext.go.jp
- ・『静岡県子ども読書推進計画』（静岡県教育委員会）www2.pref.shizuoka.jp
- ・『小学校学習指導要領解説国語編』（文部科学省）www.mext.go.jp
- ・『中学校学習指導要領解説国語編』（文部科学省）www.mext.go.jp
- ・『これからの学校図書館の活用の在り方等について』子どものサポーターズ会議
- ・水戸部修治 『小学校国語科言語活動パーフェクトガイド』 明治図書 2011
- ・桑田てるみ 『思考力の鍛え方 学校図書館とつくる新しい「ことば」の授業』 静岡学術出版 2010
- ・熊倉峰広 『「味見読書」で本離れがなくなる！』 明治図書 2003

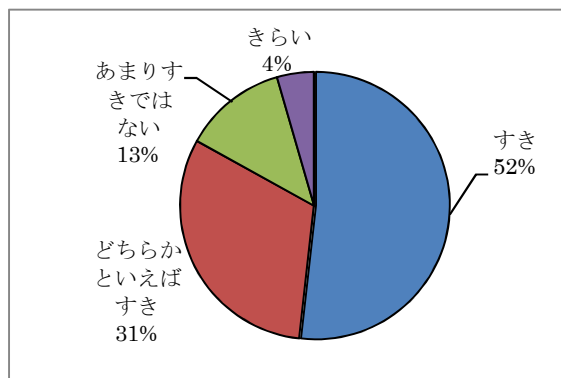
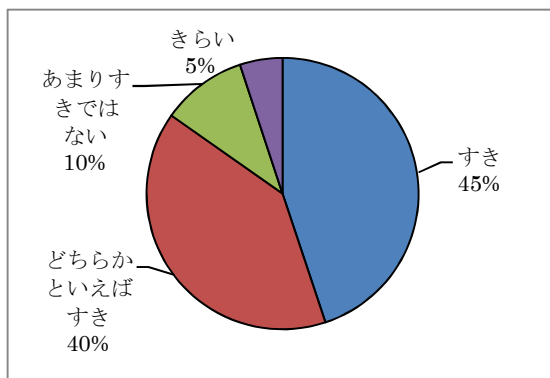
【参考資料】

資料 1－① 学校図書館の活用に関するアンケート結果集計（小学校）

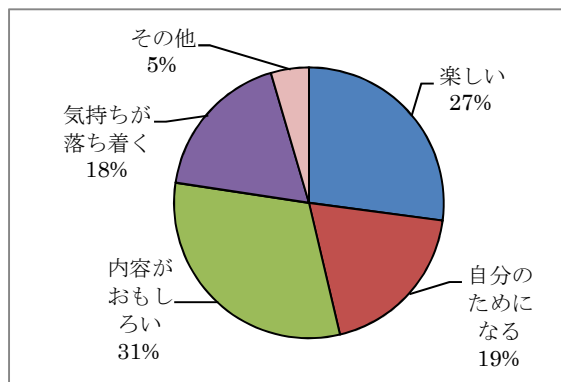
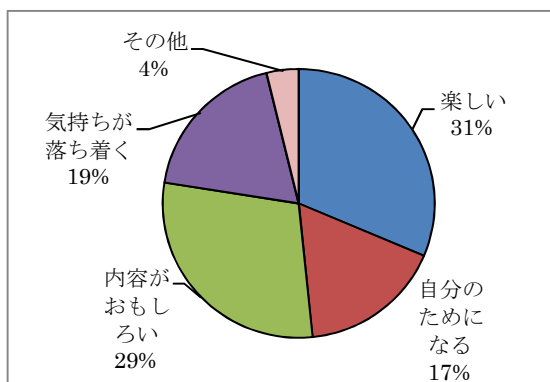
対象：研究協力員の所属する小学校 2 校における抽出学級の児童

【事前：平成 26 年 5 月（118 人対象）】 ➡ 【事後：平成 26 年 12 月（112 人対象）】

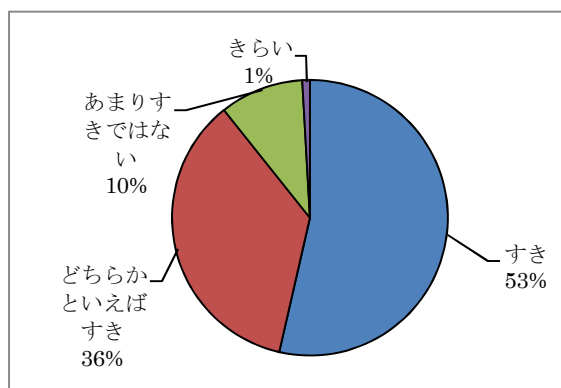
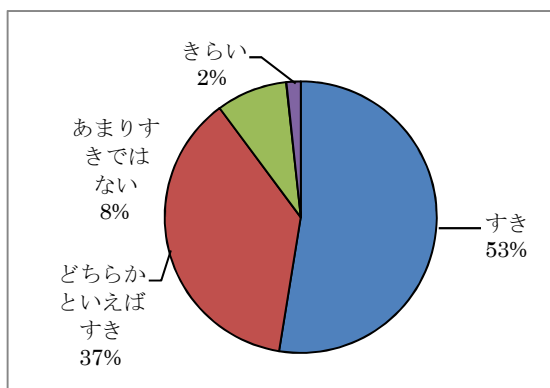
問 1 本を読むのは好きか。



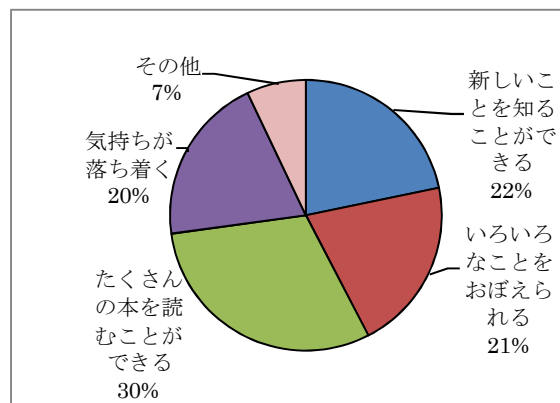
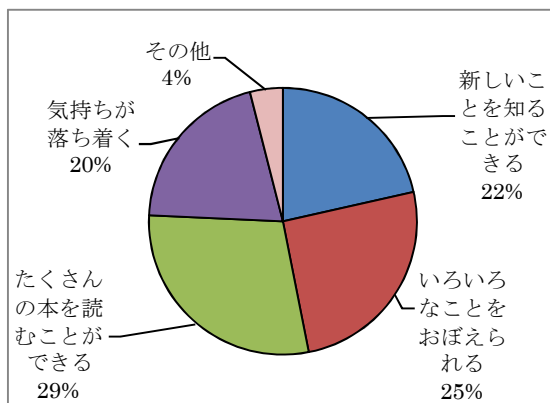
問 2 本が好きな理由は何か。



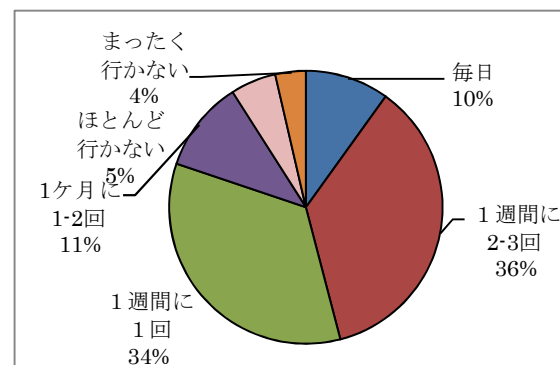
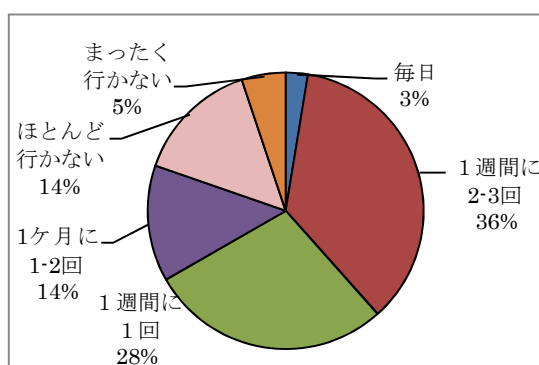
問 3 学校図書館に行くのは好きか。



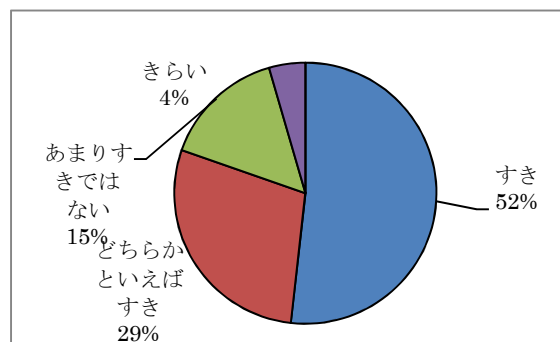
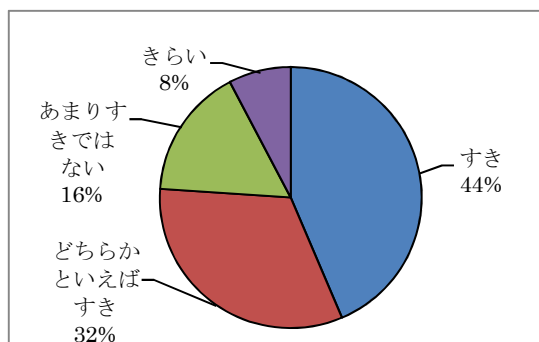
問4 学校図書館に行くことが好きな理由は何か。



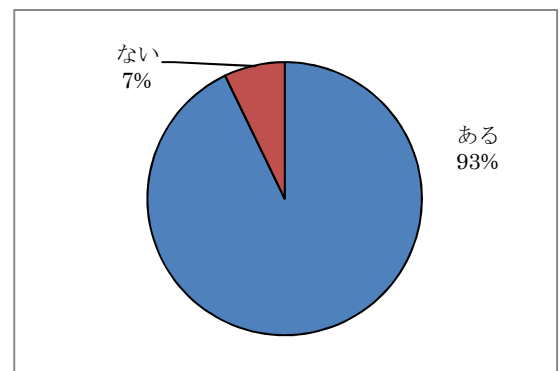
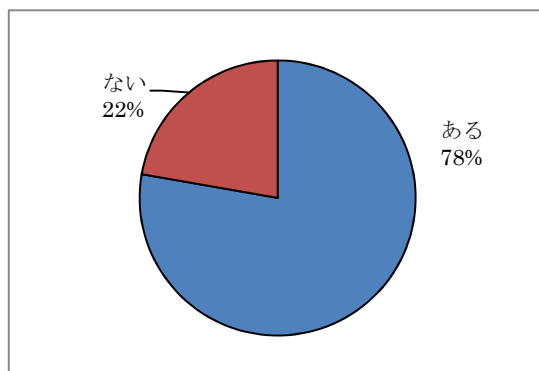
問5 休み時間に学校図書館にどのくらい行くか。



問6 授業の中で本を読んだり、本を使って調べたりすることは好きか。



問7 知りたいことを学校図書館や市の図書館で調べたことがあるか。

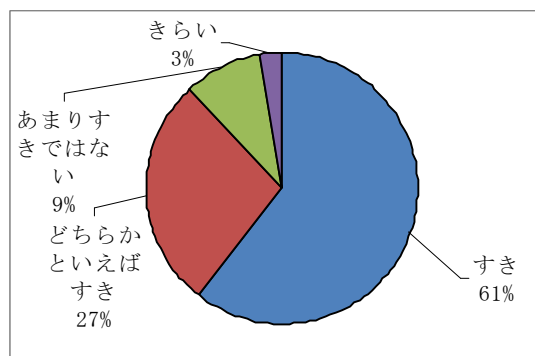
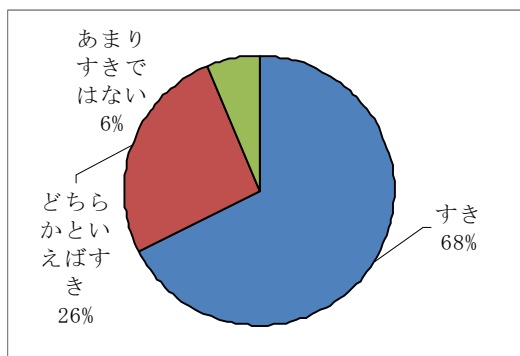


資料 1－② 学校図書館の活用に関するアンケート結果集計（中学校）

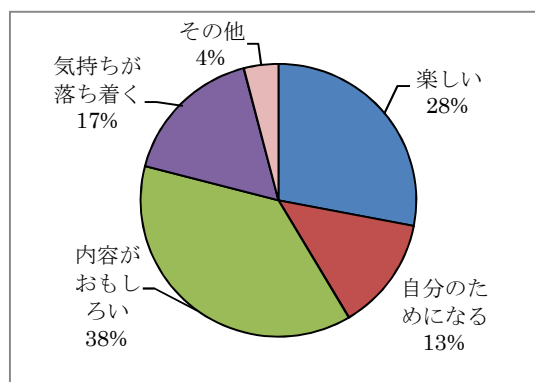
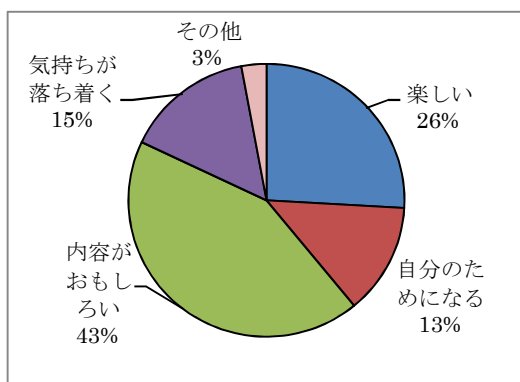
対象：研究協力員の所属する中学校 2 校における抽出学級の生徒（188 人）。

【事前：平成 26 年 5 月（188 人対象）】→【事後：平成 26 年 12 月（184 人対象）】

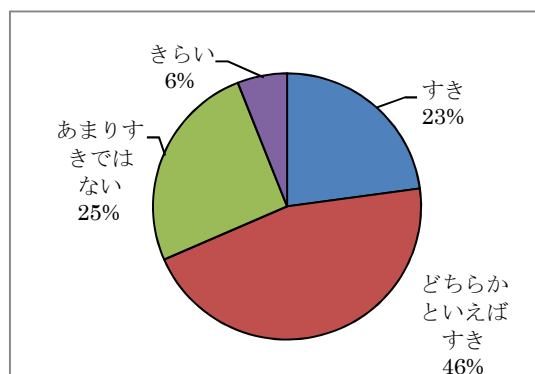
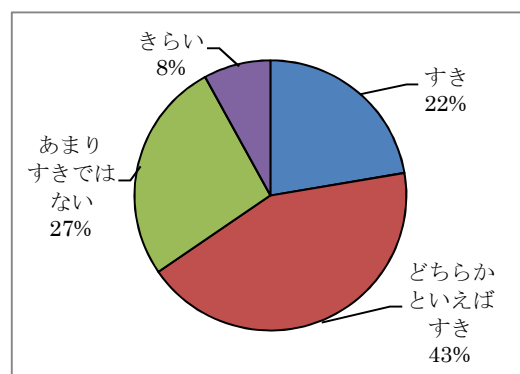
問 1 本を読むのは好きか。



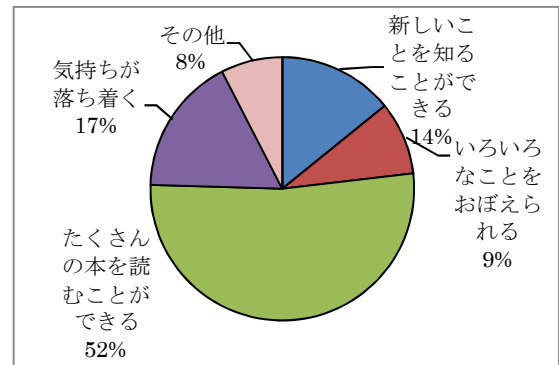
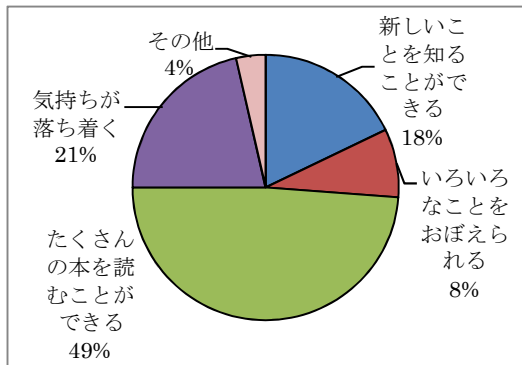
問 2 本が好きな理由は何か。



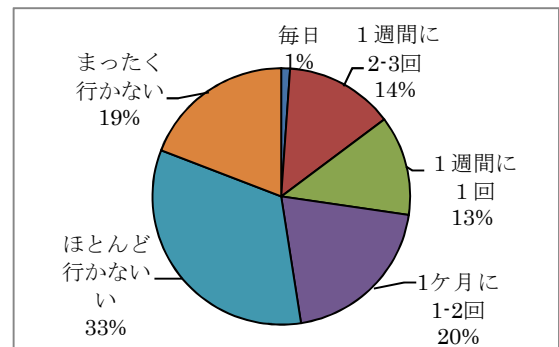
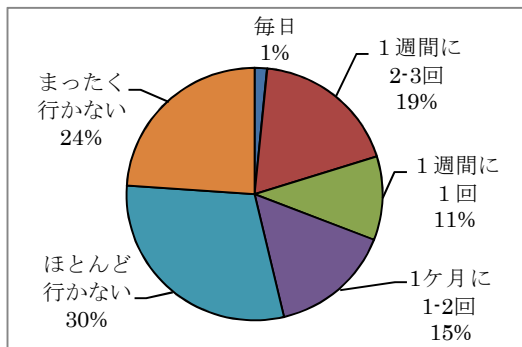
問 3 学校図書館に行くのは好きか。



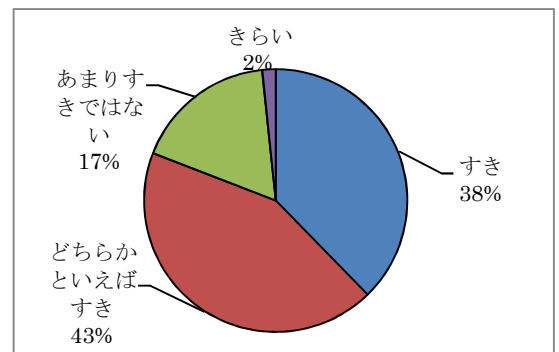
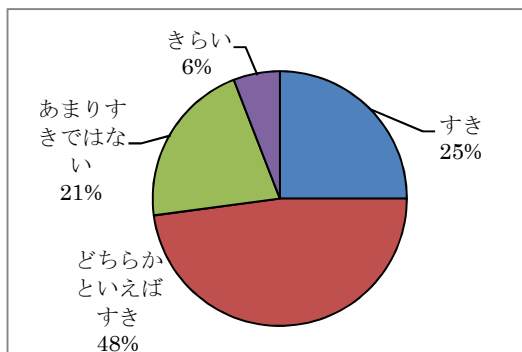
問 4 学校図書館に行くことが好きな理由は何か。



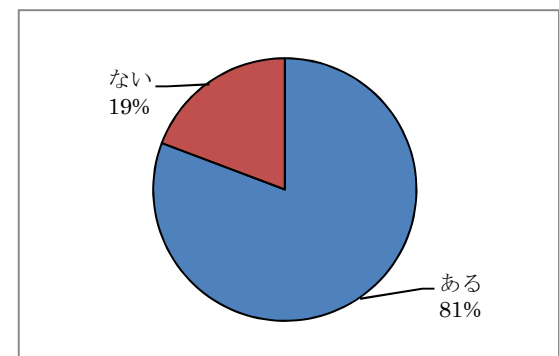
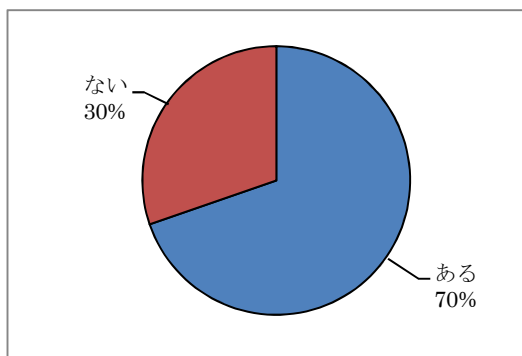
問5 休み時間に学校図書館にどのくらい行くか。



問6 授業の中で本を読んだり、本を使って調べたりすることは好きか。



問7 知りたいことを学校図書館や市の図書館で調べたことがあるか。



【研究組織】

研究協力員

島田市立島田第五小学校 教諭 森下 純子（平成 23 年度所属校：島田市立大津小学校）
牧之原市立片浜小学校 教諭 石間 郁代（平成 23・24 年度所属校：牧之原市立相良小学校）
藤枝市立藤枝中学校 教諭 立林 弘美
掛川市立城東中学校 教諭 夏目 智子

協力をいただいた学校司書

牧之原市立相良小学校 眞子 尚代
藤枝市立藤枝中学校 池田 由美子 村松 智子
掛川市立城東中学校 浅井 稔子

研究顧問

静岡文化芸術大学・常葉大学 講師 林 容子

研究担当所員（総務企画課生涯学習推進室）

（平成 23 年度）

室長兼主任指導主事 栗田 恵理
指導主事 夏目 聡美
指導主事 袴田 眞也
指導主事 井上 千春
主査 鈴木 勇治
実務研修員 鈴木 涼子

（平成 24 年度）

室長兼主任指導主事 伊藤 斎
指導主事 袴田 眞也
指導主事 井上 千春
指導主事 飯島 美智子
主査 北原 裕子
実務研修員 小林 恵子

（平成 25 年度）

室長兼主任指導主事 伊藤 斎
指導主事 袴田 眞也
指導主事 井上 千春
指導主事 飯島 美智子
主査 北原 裕子
実務研修員 大石 睦美